
哀しき夜叉

鬼羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

哀しき夜叉

【Nコード】

N3848S

【作者名】

鬼羅

【あらすじ】

銀時が1人で押入れの整理をしているとき、封筒に入ったボロボロの手紙を見つける、その手紙は銀時の師である吉田松陽が処刑される前夜に最後の言葉として送っていたものだった。手紙の内容とは…？

……… 基本的には過去のお話です。

押入れ

「ああゝ暇。」

この日、珍しく万事屋には新八と神楽の姿はなく銀時1人だった。

ジャンプも読んだ、昼寝をしようかと思ったが

そのような気分でもなかったので和室にある押入れを整理しようと考えた。

ゴソゴソと中に入っているダンボールなどを出していく。

銀時押入れの奥に手を伸ばしたとき、紙のようなものに触れた。

銀時：「こんな奥になにが入ってんだ??」

奥にあった物、それは封筒に入れられた手紙だった。

銀時：「これ、もしかして…」

中に入っていたものを取り出す。

差出人の名は

『吉田松陽』と書かれていた。

銀時：「…やっぱり………せんせい。」

押入れ（後書き）

1話目読んでいただきありがとうございました。

小説を書くのは初めてなので少しでもアドバイスをして頂くとありがたいです。

いつまで続くのかはわかりませんがよろしく願います

想い（前書き）

2 話目です。

駄目な文章ですがよろしく願いします！

想い

銀時は持っていたものを見る。

古くてボロボロのその手紙には彼自身、見覚えがあった。

それは、銀時、高杉、桂の恩師である差出人の吉田松陽が

幕府に処刑される前夜に最後の言葉として1人ひとりにたくしたものだ。だからだ。

久しぶりに見る恩師の字。

しっかりとしたその字に懐かしさを覚える

だが、それと同時に憎しみ、哀しみが一気に込み上げてくる。

恩師に会いたいと願うがもう遅い。

幸せだったあのころには戻れない

銀時の中にある想い、そして、松陽の死。

忘れようとしていた記憶が蘇る。

想い（後書き）

…短いですね。本当にすいませんでした!!
次から過去の話になります。
ありがとうございました。

出会い

『屍を食らう鬼が出るときいて来てみれば……………君がそう?..?』

男は屍の上で握り飯を食べる鬼と呼ばれた子供の頭撫でた。

『またずいぶんと、かわいい鬼がいたものですね』

頭を撫でられた小さな鬼はその手を払い刀を抜く。

『^{それ}刀も屍から剥ぎ取ったんですか

童1人で屍の身ぐるみをはぎ、そうして自分の身を護っていたんですか

たいしたもんじゃないですか

だけど、そんな剣もついでにありませんよ。』

鬼は刀を向けたまま、語りかける男はその行動を見て

フツと笑い話を続ける

『人に怯え、自分を護るためだけにふるう剣なんて

もつ捨てちゃいなさい。』

男は腰にさしていた刀をとり、鬼に投げる。

鬼は驚いた様子で刀を受け取り男を見る

男は背を向け歩きだした

『剣^{そいつ}の本当の使い方をしりたきやついてくるといい。

敵を切るためではない、弱き己を切るために…

己を護るのではない、己の魂を護るために。』

小さな鬼は貰った刀を抱きかかえ、その男について言った。

出会い（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

名前

「そういえば、自己紹介がまだでしたね

私は吉田松陽というものです。あなたの名はなんというんです？」

松陽は後ろをついて歩く鬼に話しかける。

「なまえ？」

松陽は一瞬驚いたような顔をしたあと、優しく答える

「はい、自分の呼び名のことです。あなたは今までなんと呼ばれていたのですか？」

「……………おに」

「…そうですか、では私がつけてもかまいませんか？」

「……………え？」

松陽が笑顔で問いかける。

問われた本人はキョトンとした顔をしていたが

「別にいいけど…」

それよりお前俺が怖くねえの？」

「怖い？あなたのどこにそんな要素があるというんです」

「いや…俺髪の毛こんな色だし、瞳も紅い今までの奴はそれ見て逃げるやつがほとんどだった」

松陽は小さな鬼をじっと見たあと目線を合わせる。

「いいですか、他人は皆自分とは違った姿をする人をおかしな目でみてしまうことがあります

確かにあなたは普通の人とは違います。でもそれは見た目だけ、

中身はまだまだ小さい子供でしかありません

あなたを化け物や鬼と呼んだ人達は見た目だけで人を判断する者です。

そのような人達の言葉など忘れてしまってもかまいません。

少しずつでもいいんです。前に進んでいきましょう？」

「…うん。」

「さて、名前の話に戻りますが、“銀時”はどうでしょう」

「ぎんとき？」

「はい、“銀”はあなたの髪の色からいただきました。

そして“時”という字はこれから生きていく時代いろいろなことがあることでしょうが、

そんな中でも自分を見失うことなく精一杯生きて欲しいという願いをこめて…

気に入ってもらえたか？」

「うん。ありがとう」

「そう言ってもらえると私も嬉しいです。じゃ、帰りましょうか…銀時」

「うん」

名前（後書き）

読んでいただきありがとうございました

銀時の名前ですが

松陽先生といたときの苗字は『吉田』という設定にしておきます。

『坂田』はまた後ほど…

二人

松陽：「銀時？着きましたよ。」

松陽は自分の背中中で眠っている銀時に声をかける

あの後落ちていた刃物で足を怪我して歩けなくなってしまった銀時を松陽が家まで背負ってきたのだ

松陽：「……ん。あれ、ここどこ」

寝起きの銀時は眼をこすりながら松陽に聞く

松陽：「私の住んでいる家です。今日からここがお前の家です。」

銀時：「……いえ……すむところ？」

松陽：「そうですね、入りましょうか。」

銀時：「うん。」

ーガラガラー

家に入ると誰かがこちらへ走ってきた

??：「先生！おかえりなさい！」

女の子のような顔立ちをした男の子が松陽に声をかける

背中にいる銀時には気づいていないようだ

??：「先生、おかえりなさい、あと背中のそれ…なんなんですか？」

次に来たのは少し目つきの悪い男の子

銀時を指差し松陽に問い掛ける

さきほど話をしにきた子供も銀時それに気づき首をかしげる

松陽：「二人とも来ていたんですか…休みの日まで熱心にありがとうございます」

この子は銀時といいまして、今日からここに住むことになりました

あなた達には後日紹介しようと思っていしましたが、まあ、いいでしょう。」

松陽は銀時が今までしてきたこと、化け物や鬼と言われていたこと

を全て話した

最後に

松陽：「この子がしてきたことは決して許されることではありません
せん

だけど、銀時自身今までずっと独りで苦しい想いをしながら
生きてきました。

そのせいか、あなた達の中では当たり前なことでも銀時にと
っては初めてのことや知らないもの
がたくさんあります。それらを教えていくためにもあなた
がたの力を借りねばなりません

……よろしいですか？」

??：「先生がそこまでいうなら……」

かわいらしい顔立ちの男の子が呟く、そして、背中に乗ったままの
銀時に目を向ける

銀時も目を合わせる

??：「俺は“桂 小太郎”よろしくな、銀時！」

??：「…俺は“高杉晋助”これからよろしくな…銀時」

銀時は内心驚きを隠せないでいる

今まで化け物としか言われたことがなかったため、いきなり自己紹介をされると

どのように返事を返したらいいのかわからなくなってしまった

それに気づいた松陽は「今はあいさつだけでもかまいませんよ」と小声で言う

あいさつがどういうものなのかよくわからない銀時だったが

銀時：「…こっちこそ、よろしく」

声は小さかったが二人にはとどいていたらしい、

「ああ！ / おう！」

笑って返事を返してくれた。

桂：「それじゃ先生、今日はこれで帰ります！」

松陽：「そうですか。塾のほうは明日も休みですし、小太郎と晋助さえよろしければ

銀時の話相手にでもなってもらえるとありがたいのですが…」

高杉：「俺も桂もそのつもりです、銀時ともつと話がしたい」

桂：「俺もです！なので先生また明日！ 銀時！またな！」

そう言つて二人は家に歸つていった

銀時にとって初めてできた友達だった

二人（後書き）

読んでいただきありがとうございました！

幸せ（前書き）

相変わらず駄目な文章で…ほんとすいません

5話目の最後「また明日」といつていたんですけど、
1週間たったってことになってます
すいません

幸せ

銀時がここに来て1週間がたった

桂と高杉は毎日訪れる。もちろん銀時に会うために

遊びをあまり知らなかった銀時にもできるようなことを考えてくれた

本を読むにしても、銀時は字が読めなかったため、

二人が読み書きを教えるときもある

朝、昼、晩、と食べる物があることや、布団の中で眠ること、

自分を鬼や化け物と言っのではなく『銀時』と呼んでくれる人たちがいる

人なんて信じないと思っていた自分が…その存在価値を認めてもらえたのかと

嬉しい気持ちでいっぱいになる

しかし、幸せなときというのはそう長くは続かない…

この先に起こる事件により彼らの魂^{こゝろ}には二度と消えることのない傷
ができてしまう

幸せ（後書き）

読んでいただきありがとうございました

感想、アドバイスをお待ちしております！！

頼み

高杉：「先生さ…最近よく出かけるようになったよな。」

松陽が寺子屋をやっている部屋で本を読んでいた3人

銀時が来てから半月がたつ。2日ほど前から桂、高杉らと一緒に寺子屋に通い始めていて、

松陽のことも“先生”と呼ぶようになった

桂：「そういえばそうだな…今も何処かへ行っているようだしな。」

「

銀時：「心配してんの？」

桂：「そんなことはない！俺は先生を信じているからな！」

高杉：「ツラあ、無理すんなって実際、銀時の言うとおりどころ？

先生が心配だからここにいろんじゃねえか隠す必要なんてねえよ。」

桂：「そうだな…。」

―数時間後―

松陽：「おや…ここにいたんですか。」

松陽が帰ってきた

桂：「先生！どこに行っていたんですか！？」

松陽：「少し、となり村まで…」

今ここにいるのはあなた達だけですか？

3人がうなずくと、松陽は銀時以外の2人の方に体を向ける

松陽：「今日だけでもいいんです…私の家に泊まってもらえませんか？」

桂、高杉：「……………え？？」

松陽：「はやうちに渡しておきたいものがあるんです」

桂：「…別にいいですよ？それより、渡したいものって今じゃだめなんですか？」

高杉：「俺もそう思った…それに、その渡したいものってなんなんですか？」

松陽：「それは、後ほど」

桂：「…………？それじゃ、着替えを持ってまた来ます!!」

高杉：「銀時!! またあとでな!!」

頼み（後書き）

読んでいただきありがとうございます！

お泊り

夕方ごろ、荷物を持った桂と高杉がやってきた

用意されていた部屋へ向かい持ってきたものを整理し、

それが終わると2人は銀時の部屋行く

3人で遊んでいると、松陽の声が聞こえてくる夕食の準備ができた
そうだ

居間へ行き、並べられたものを見た3人は

「いただきまーす！」

声を揃えて言う姿は兄弟のようにも見える

食べてる最中も桂は行儀よくしっかり食べているのに対し、

銀時と高杉はおかずの取り合いを始めてしまう

食べ終わった後は、松陽も含め、4人で風呂に入る

広いとは言えないその場所で、好き放題に遊び、はしゃぐ3人

風呂からあがり体を拭いていると、

松陽は3人にあとで自分の部屋に来るようにと言う

桂、高杉が疑問に思っているとき、銀時は妙な胸騒ぎがしてならなかった

お泊り（後書き）

少し短くなってしまいました…
すいません

教本

夜の11時ごろ、

まだ小さい銀時達にとっては眠たくてしかたのない時間だ

そんな時間に呼び出すなんて…と不思議に思った3人は髪を乾かしたあと、

すぐに松陽の部屋に向かった

松陽：「こんな時間にすいません。昼間言っていた渡したいものとはこのことです」

部屋に入ってすぐに差し出されたものは教科書と封筒に入った手紙だった

桂：「これは？」

松陽：「新しい本です。」

あなた達も十歳前後になります。今まで使っていたのとは違って

すこし難しいかもしれませんが、それなりに濃い内容にはなっているはずです。

私の教えがなくとも理解はできるでしょう。

あと、手紙のほうは中身を見ないで懐にしまっておいてください。」

桂：「教えがなくともってどういうことですか？

手紙に関しても、懐にしまっておくだけって…読まなくてもいいんですか」

3人は松陽を見る

松陽：「手紙は、今読むのは早いということです。

あなた達がもう少し大きくなったとき、読んでください。
教えがなくとも…というのはですね…

自分で言うところになってくるのですが、

あなた達が大人になるまで生きていられるかわかりませんからね。」

高杉：「先生もとしだからな。」

松陽：「晋助？どういう意味ですか？」

腹黒い笑みを浮かべ、問いかける

高杉：「いや…なんでもないです」

真っ青になった顔で答える

松陽：「なら結構です。本当に、今日は呼び出してすみませんでした」

これだけは渡しておきたかったのでね……。それじゃあ三人とも、おやすみ。」

銀時、桂、高杉：「おやすみなさい」

教本（後書き）

今回もありがとうございました

松陽が3人に渡した本というのは紅桜のときに桂と高杉がもっていた本のことです。

事実（前書き）

今回少し長いと思います

事実

銀時：「先生、入ってもいい？」

松陽：「はい、珍しいですね。こんな時間に…眠れないんですか？」

時刻は夜中の2時、10歳前後の子供が起きているような時間ではない

銀時：「まあ、そんな感じ…」

さっきの話なんだけどさ、俺達が大人になるまで

生きてられるかわからないってどういうこと？」

松陽：「恥ずかしいですすね…」

自分から年の話をするなんて…「なにか隠してんだろ？」

銀時は松陽の言葉を遮るように問いかける

松陽：「……………わかりましたよ

いつかは話をせねばと思っていたんでね」

真剣な眼差しで銀時を見る。そして、

松陽：「私は、幕府に追われている身なんです。」

銀時：「……………うそだ……………先生がなにかしたの？」

それとも……………俺のせい？俺みたいな鬼を拾ったから……………」

松陽：「銀時のせいじゃありません！！」

松陽は銀時に怒鳴り声をあげてしまったことを少し後悔した…

松陽：「……………すいません話を続けますね」

今言った幕府のなかの1人が、私の居場所を突き止めてしまったんです。

こうなってしまった以上、銀時…あなただけではなく

小太郎や晋助。そのほかの生徒達も巻き込んでしまいかねない。

今は何事もなく毎日を過ごしてはいますが、

いつ私を殺しにくるかはわかりません。」

銀時：「……………じゃあこれだけ聞かせて？先生は……………なにか悪いこと

してこんなことになってるの?」

銀時は思っていたことを聞く

松陽：「いいえ、銀時は天人は知っていますね?」

コクリとうなずく

松陽：「私は、その天人と…」

人間と天人が共に過ごしやすい世界にしたかったただけなんです。

ですが、幕府の方々は天人を敵視するばかり…

私の考えはあの人たちには邪魔だったんですよ。」

松陽が哀しそうに笑いながら銀時に話す

松陽：「…私が話すべきことは全て話しました。」

銀時：「……………だから殺されるの?俺は、先生の考えいいと思った。」

それと、言いたかったこと言わせてもらっ

俺は先生と会って、いろんなこと教えてもらった。

剣の使い方もそうだし、人ってのは信じるもんだって、

信じていいんだって思わせてくれた。家族がなんなのかも…グスッ

でも、先生がいなかったら俺…きつと自分がなんなのかわからないまま…

鬼のまま死んでたと思う。……グスッ

それだけ、俺はあんたに救われてたんだよ!!

まだ借りも返してねえってのに…殺されるだど？弱気なこと言ってんじゃねえよ!!

先生がいなくなったら……また独りになっちゃうじゃん…

もう、独りになんてなりたくねえよ…。」

銀時の様子に驚きを隠せないでいる松陽

銀時は泣きながらも思っていたことを伝えた

そのせいか『ゼエゼエ』と息があがっている

そんな銀時を松陽が力一杯に抱き寄せる

松陽：「銀時がそこまで思ってくれていたなんてね…驚きました。

借りをつくったとかそんなこと思わないで下さい。

今の言葉が聞けただけで十分ですよありがとうございます

疲れたでしょう？もう寝なさい？」

銀時の背中をさすりながら声をかける

銀時：「……グスツ……じゃあ、今日だけでもいい……一緒に寝て？」

松陽：「……仕方ないですね、今日だけですよ」

布団を敷き、2人で入る

さっきの泣き顔とは裏腹に、松陽が隣にすることで安心したのか

ぐっすりと眠っている銀時

そんな銀時をみて松陽は、明日2人で買い物にでも行こうかと考えていた

事実（後書き）

めちゃくちゃですよね…

もう少しうまくまとめられるよう頑張ります！

お出かけ

次の日の昼頃、銀時が目を覚ます

松陽と話をしていたため、彼が寝たのは夜中の3時前だった

布団から出て松陽がいるであろうという部屋に行く

銀時に気づいた松陽は

松陽：「目が覚めましたか…どうします？ なにか食べますか？」

銀時：「いや、今はいらない…それよりも小太郎と晋助は？」

銀時は昨日泊まりに来ていたはずの桂と高杉のことを聞く

松陽：「ああ、2人ならさつき帰ってしまいました。

明日は剣術の授業があるのでいつもより早くに来るそうですよ。」

銀時：「ふーん。そうなんだ。」

あまり話をしようとしないうちに銀時を見た松陽は

松陽：「銀時……どこか行きましょうか。」

銀時：「……………は？」

松陽：「どうせ暇でしょう？」

たまには一緒に買い物でも…欲しいもの、買ってあげますよ？」

銀時：「欲しい物！？行く！ちょっと待ってて、着替えてくる！」

まだまだ物に釣られやすい性格である

―数分後―

銀時が戻ってきた

手には松陽から貰った刀を大事そうに抱えている

…まあ、それはいつものことなのだが

銀時：「なあ、先生。買い物ってどこまで行くの？」

松陽：「そうですねえ…とりあえず手紙でも出しにいきましょうか

そのときにどこに行くか決めましょう?。」

そういつて歩きだす

松陽：「銀時はなにが欲しいですか?。」

銀時：「んゝ饅頭!。」

松陽：「…じゃあ少し遠くの村まで行きましょうか。」

しばらく歩いたところで松陽が

松陽：「…しまった…銀時。

財布を忘れてしまったようなので、この手紙、かわりに
届けてはくれませんか?。」

銀時：「…ったくなにやってんだよ、

まあいいや届ける手紙貸して?ちゃんと行ってくるから。

」

松陽：「すいません…すぐに戻ります

なので、今いるこの場所でまっついていてください。」

銀時：「わかった!それじゃあまたあとでな!。」

松陽：「はい………またあとで。」

お出かけ（後書き）

今回もありがとうございました

感想よろしく願います。

待ち合わせ

夕方、1時間前銀時は手紙を届け、待ち合わせをした場所で松陽を待っていた

その場所に来てかれこれ30分になる

銀時：「先生遅い…」

銀時は1人呟く

ここから松陽の家までは、子供の足では1時間近くはかかる

だが、大人…つまり松陽からすればそこまで遠い道のりでもない

そんなことは銀時だって知っている

だからよけい不安になってしまう

ただでさえ、昨夜あんな話を聞かされたのだ

気になって仕方がない

どうしようかと思ったが日も沈みかけてきたため、饅頭は諦めて

走って家に戻ることにした

この先になにかあるのか

知りもしないで…

待ち合わせ（後書き）

短くてすみません！！

対決（前書き）

今回は松陽先生の視点いきたいと思います
よろしく願います！

対決

銀時と別れ、家に帰っていた松陽は忘れていた財布を手に取り

玄関に向かったときだ

どこから入ってきたのかはわからないが黒いマントのようなものに身を包んだ男が松陽の後ろに刀を向けてたっていた

松陽：「！？……どこから入ってきたんです？」

すぐさま相手から離れ距離をとるがその気配のなさに冷や汗を掻く

??：「フツ、そんなことどうだっていい…吉田松陽。」

幕府…いや、我々天導衆の命により今この場所で死んでもらおう。」

松陽：「天導衆！？なぜ私1人のことでそこまで組織が動いているんです!？」

…ま、今はそんなこと言っている状況ではなさそうですし。

私も今死ぬわけにはいきませんから…大切な約束があるのでね。」

そう言つて刀を抜き構える

???：「組織がなぜ動いているかだど?そのようなこと知るわけがなかるう

私は言われたとおり動くだけだ。それに、お前が勝手にしてきた約束など

どうなろうと知ったことか。そんなことのために命を懸けるとでも言つのか

さすが、馬鹿は違うな。本気で私に勝てるとでも?そこまでの自身が

あるのなら見せてもらおうではないか!」

男は松陽の間合いへ入り急所を狙う

松陽も相手の攻撃をかわしながらも攻めていくお互い1歩も譲ることはない

約20分

先に体力の限界がきたのは松陽のほうだ

男はそれを狙つて攻撃を続ける

お互い深い傷は負っていないものの、体力的には松陽のほうが出たのであろう

一瞬間ができてしまった

男がそれを見逃すわけもなく、左肩を貫かれ、壁に追いやられる

松陽：「うがぁあゝあゝあゝあゝ！！！！！」

ドシャーン！！

ゴリユ、グチャ、メキメキと骨が折れる音がする

？？：「クツクツクツ、もう終わりか？」

言っほどもないなつまらん。」

そう言って肩を貫通し、壁に突き刺さった刀をさらに奥へと刺していく

そのたびにメキメキと音になる

松陽が刀を引き抜こうとするが、力の入らない今の状態では抜けるわけもない…

たとえ抜けたとしても刀を持つのに重要な左腕が潰されてしまっただけは
相手を攻撃することはおろか、まともに振ることもままならない

松陽自身、肩を含め至るところから血を流し続けていたため

意識が朦朧としてきている

そのときだ！

銀時：「先生！！」

息をきらした銀時が帰ってきたのだ

走って（前書き）

銀時の視点でどうぞ

前回の話での銀時バージョンといっついで

走って

銀時：「ハア、ハア、…ゴホツ！」

咳き込みながらも必死になって走る

いやな予感がしてならないのだ

頭の中では松陽の無事しか考えられない…それしか考えたくない…

落ちていた石ころや木の枝に躓き転んだ

血が滲む…痛いとは思ったが気にしている場合ではない

少しでも早く松陽く無事を確かめたい

家の近くまで来た

誰かが銀時に近づいて来る桂と高杉だ

桂：「おーい。銀時！どうした、そんなに慌てて…」

銀時：「ごめん、小太郎！晋助！また後でな！」

2人と話をする余裕もなく、走り去る

高杉：「…なんだ…あいつ。」

桂：「先生の家に向かったようだな…追いかけてみるか？」

高杉：「ああ。なんにもなきゃいいがな。」

やっとの思いで家に着き、玄關の戸を開ける

そこで銀時はある匂いに反応した

そう血の匂いだ

松陽に拾われる前までは人を殺して生きてきたのだ

忘れられるわけもない

誰もいないのかと耳を澄ますとかすかだが呻き声が聞こえてくる

その方向へと進んでいき、ふすまを開くと

肩を貫かれた松陽がいた

銀時：「…ハア…ハア…先生！！！」

走って（後書き）

最後は前の話の台詞ですね…
次からはいままで通り進んでいきますのでよろしく願います

銀時の剣

松陽：「銀時！？…………ぐっ！」

銀時：「先生！！」

バシッ！！

男が近づいてきた銀時を押しつけ、肩に刺さったままの刀を抜き、

座り込んだ銀時に向ける

銀時は負けじと普段から持っている刀を抜く

松陽：「…………銀時…………その…刀は…。」

壁にもたれ掛かっている松陽が傷口を押さえながら話しかける

銀時：「わかってる。自分のために振るうんじゃないって言うんでしょ？」

何回も聞いているし…それにわかったような気がするずっと前に先生が

言ってた“武士道”ってやつが…。」

松陽は以前、銀時に自分の武士道^{ルール}とはなんなのか、それを知り、理解したうえで刀を振るようになったことがある

その時のことを忘れずに考えていてくれたのかと内心驚いている松陽
そんなことを知るわけもない銀時は話し続ける

銀時：「俺は、殺すためじゃない…大切なものを護るために、

先生が教えてくれた俺の魂^{こゝろ}を護るために剣を抜いて戦う
！！

それが、俺の武士道^{ルール}。」

松陽：「はい。それでいいんです…その思い、忘れてはなりませんよ？」

銀時：「うん。わかってるよ」

??：「いつまで話しているつもりだ!!」

ガキイイイイン!!

??：「……!!…ほう、わっぱにしてはたいしたものだ…

だが、しょせんはただの子供。私に勝てるわけもあるま

い。」

大人と同じくらいの力を持つ銀時だが、相手との差は大きい

ふすまごと隣の部屋に飛ばされた

それでもすぐに起き上がり攻撃していく

ピツッと男の頬に傷がついた

??：「私に傷をつけたか…本当にたいしたものだ

もう少し遊んでいたいのだが私にも都合というものがある

吉田松陽を殺し、次にお前を殺すことにしよう。」

銀時：「ふざけんじゃねえ!……ぜえ……はあ……先生は……俺が護
る!」

向かってくる銀時に対し、男は刀を構え、振りあげる

??：「……しつこいガキだ……。」

ザシュッ

肩から腰へ大きく斜めに切られ血がドクドクと流れ出てくる

松陽：「銀時！！！」

松陽は痛む体を引きずりながらその場に倒れてしまった銀時に近づき声をかける

すると、倒れていた銀時がたちあがったのだ

銀時：「……………はぁ……………はぁ……………これで…殺ったつもりか？……………クソ野郎！」

??：「……………まだやる気か？……………なら、これで最後だ…楽しんでやろう。」

松陽：「銀時いいい！！！！！」

グサッ

師の最後

ポタ…ポタ…

銀時：「……え……なんで……」

??：「ほう、こいつのためにそこまでするか…松陽。」

そう、刺されたのは銀時ではなく松陽のほうだった

銀時が刺される直前、松陽が銀時の前に立ち、盾となったのだ

座り込んだ松陽に銀時が涙目になりながらも声をかける

銀時：「……せんせ……なんで…俺なんかを……」

松陽：「……はあ…はあ…大切な…人だからに…決まってるじゃないですか……」

こんなところで死んではいけませんよ。」

薄く微笑む

“こんなところで死んではいけない”

松陽が言うこの言葉は、何故か最後の言葉のように聞こえてきて

銀時の胸を締め付ける

松陽：「……ぜえ……はあ……ゴフッ」

血を吐きながらも立ち上がった

??：「まだやるつもりか…」

フッ、ここまでやって死ななかったのはお前が初めてだった

吉田松陽。この“黒夜叉”が全てを終わらせてやるっ。」

お互い刀を構え直す

そして、同時に動いた

ブシアアアアアア

倒れたのは…吉田松陽だ

松陽：「……ぜえ……ぜえ……ゴフッ、がはっ、」

黒夜叉：「くっくくくつ、苦しいか…すぐに楽にしてやる

そこのわっぱ！よく見ておれ！

お前の大切な人とやらの首が飛ぶところをなあ！」

そういうと刀を振り上げ、松陽の首めがけて一気に振り下ろす

銀時：「やめろおおおおお！！！！」

ザシュッ、 ゴトッ

首が落ちる嫌な音した…それと同時に銀時の中の何かが壊れた

そのことに銀時自身気づいていない

黒夜叉は笑いながらも近づいてきた

銀時：「……………くるな……。」

黒夜叉：「…なんだって？」

銀時：「おれに……………近づくなああ！！！！」

ガキイイイイイイン

黒夜叉：「さっきより動きがよくなったな…吉田が死んだからか

……………？」

銀時：「うるせえ！殺してやらああああ！！！！！！」

ブシイイ

黒夜叉：「…っう……きさまぁぁ!!」

銀時は今の攻撃で相手の左目を大きく傷つけた

そのときの衝撃で刀を落としてしまった黒夜叉は、左手で斬られた目を押さえ、

空いている右手で銀時の首をつかんだ…

足がつくか、つかないかのところまで持ち上げる

首をつかみながら血にまみれた手で落とした刀をとり、銀時に向ける

銀時：「…っうぐ……がはっ」

息ができなくなり、力が入らなくなって刀を落としてしまった

黒夜叉：「銀時だったな、この左目を奪ったこと、死んで詫びよ。」

グサッ

黒夜叉の刀が銀時の腹を貫いた

師の最後（後書き）

「黒夜叉」… やつと名前でしたね

これからよろしくお願いします！

崩れたもの

黒夜又は銀時の腹に刺さった刀を抜き、首を絞めていた手も離す。

その場に倒れてしまう銀時

銀時：「……つぐ、あゝあゝあゝあゝ……！！！」

倒れた衝撃で体に激痛がはしり、叫ぶしかない

黒夜又は楽しそうに笑いながら銀時の腹を蹴り、傷口をえぐる

そこまでされるとさすがの銀時も意識が朦朧としてきた

このまま死んでしまうのかと思うほどだ

そんな時、

ガラガラ

桂：「先生！銀時！」

高杉：「2人とも無事か！？」

聞き慣れた声でした…足音が近づいてくる

銀時：（来るな……殺される……帰ってくれ）

銀時の想いも虚しく血で汚れたこの部屋に来てしまった

真つ赤に染まった部屋を見た2人は一瞬だが言葉を失う

だが、すぐに正気を取り戻す

辺りを見渡すと、松陽の着物が見えたが首から上はない

そして黒で身を包んだ男が小さな銀髪のすぐ近くに立っている

高杉：「……！？銀時！？……なんだよこれ……ここでなにがあった！！？」

倒れていた銀時を抱き寄せ強く揺する

桂：「高杉！今はやめろ……こいつは酷いな……銀時？大丈夫か？」

桂が優しく声をかける

銀時：「……げて……にげて……ころ……される。」

大量の血を流して、声も小さく途切れ途切れだが、必死に伝えようとする

桂：「銀時、すまぬ。俺達は逃げるつもりはない

それよりも……お前に聞きたいことがある。」

桂と高杉は銀時を床へ寝かし、黒夜叉のほうを向く

黒夜叉：「残念ながら俺は餓鬼にようはない。」

高杉：「てめーになくても俺等にはあんだよ

そこに首がない状態で倒れている奴…

誰か知ってるよなあ？そいつの名を言ってみろ。」

黒夜叉：「ああ、吉田松陽とか言ったな…俺が殺した上からの命でな。」

桂：「ではそこに倒れえている子供は……なぜ、ここまでの重症を負わせた。」

黒夜叉：「…なぜだと？この目を見よ、その餓鬼につけられたものだ。」

それのお返しとして師と同じように逝かせてよろうと思っただけだ。」

桂：「それだけか？……そんなことで銀時を^{あいつ}あんなにしたのか！？」

黒夜叉：「ほかになにがある。」

桂：「貴様はっ

黒夜叉：「助けたいのであれば今すぐ手当てすることだ。」

このまま放っておけば、確実に死ぬだろう。」

2人の顔が青ざめ、銀時を見る

今はギリギリのところで意識を保っているようだが限界などすでに超えている

黒夜叉は銀時を一度見たあと、

黒夜叉：「お前のようなおもしろい餓鬼は初めてだった

また何処かで会える日がくることを楽しみにしているぞ。」

そう言い残し去って行った

だが、それと同時に黒夜叉は火を放っていつてしまった

モクモクと黒い煙が上がる

高杉：「なんなんだよ！あの野郎！俺達を生かしておきたいのか殺したいのかわかんねえよ！」

桂：「今はそんなこと言ってる場合ではない！銀時を連れてはやく外に出るぞ！」

そう言っただけ動けない銀時を背負い、前に進もうとしたとき、

高杉：「ちよつとまでよ！先生がまだ……！！」

崩れたもの（後書き）

今回の“崩れたもの”というサブタイトルは

家が壊れたその瞬間から銀時のなかにあった幸せだったころの出来事全てが

跡形もなく消えていったということ想い書いたものなんです
実際に崩れ落ちたのは家なんですけどね

読んでいただきありがとうございます

村の大人達

家が崩れ落ちた

3人は泣くことしかできないでいる

そんななか

村人A：「銀時^{あいつ}のせいだ…あいつと一緒にいたから先生は…。」

村人B：「そんな訳がなかるう…こんな子供になにができるというんだ。」

村人C：「俺…知ってるぜ、その餓鬼…屍を食らう鬼として噂になつてたからな。」

村人A：「本当か！？ならやつぱり……この餓鬼が殺したんだ。」

口々に言う大人達…それを聞いていた3人

とくに銀時以外の2人はありもしないことを言う大人達が許せなかった

村人A：「…ここから…出て行け。」

村人B：「二度とこの村に足を踏み入れるな！」

村人C：「お前がいると不幸になる！！」

村人A：「先生ではなくお前が死んでいればよかった。」

そう言つて銀時に向かつて小石を投げる者が現れた

我慢の限界を超えた桂と高杉が大人達に叫ぶようみ言う

高杉：「いいかげんにしろ！！」

桂：「いい大人が恥ずかしいとは思わんのか！」

それに、銀時は先生を殺したりなどしていない！！」

高杉：「銀時！大丈夫か！？」

銀時：「……………せんせ…まも…れなくて…ごめん…なさい…せんせ…」

高杉の言うことなど聞こえていない様子だった

うわ言のように呟くと、その場に倒れてしまう

桂：「銀時！？」

2人が必死に声をかけたり頬を軽く叩いたりしているがピクリともしない

完全に意識を失っているようだ

村人A：「フッ、そのまま死んじまえばいいのにな。」

高杉：「てめえ!!」

高杉が殴りに行こうと立ち上がったが桂にとめられた

桂：「やめぬか!」

一言そう言つと桂は銀時を診た

高杉：「……おい…なんかやばくねえか?」

今の銀時は血を流し過ぎたせいだろう、息が浅く、体温が下がってきており

顔色も白いというより青白い

桂が着物の裾を千切り止血しようとするがなかなか止まらない

桂：「……つくそ、本当にやばいな……。思っていた異常の重症だ…。」

高杉：「……っチ、」

桂：「ここでは手に負えない、俺の家に行くぞ!」

高杉：「お前のとこの親はあいつ等みたいなこと言わねえよな?」

桂：「そんなことより銀時が先だろう。」

「ここからだとお前の家より俺の家のほうが近い。それだけだ。」

高杉：「…そうかい…」

そう言っ て銀時を背負い自分達の周りにいた大人達を掻き分け

桂の家に向かった

村の大人達（後書き）

読んでいただきありがとうございます！

桂の家で

桂の家に着いた

運がいいのか悪いのかはわからないが

桂の両親は家にいなかった、明け方には帰るという紙が置いてあるだけだった

その紙を見たあと、すぐに自分の部屋に向かう

布団を敷き、銀時を寝かせる

用意していた手ぬぐいや包帯などで

自分達の出来る範囲内のことは全てやった

血は止まったし、顔色も少しはマシになっただろう

あとは目が覚めるのを待つだけだ

銀時の手当てが終わると同時に数時間前に起こったことが頭の中に過る

高杉：「……………せんせい……………」

もう会うことのない人の名を呟く

高杉：「首…がなかった…銀時^{ぎんとき}さ、1番見たくないものをみちま
ったんだよな…」

こいつが先生を殺すわけねえってのに村中の大人たちに
疑われて…

なんで銀時^{ぎんとき}はつか…髪と瞳の色が違っただけなのにな…
…。」

桂：「ああ、俺達となにも変わらないただの餓鬼というのに。」

高杉：「……そうだよな。」

会話が続き、暗く、重たい空気の中、スウッと朝日が差ししてきた

高杉：「もう朝か…。」

桂：「そうだな…時間が経つのも早いものだ…。」

銀時：「…ん、…うん…あれ？こたろ…し…すけ？ここど
こ…。」

桂：「銀時！？気がついたか…ここは俺の家だ。」

銀時：「そっか…っ！、そうだ家に帰らないと…。」

高杉：「銀時！しっかりしろ！あの家は…先生はもう…」

泣きそうになるのを堪えるのに必死だった

そんななか、桂が立ち上がり

桂：「今はなにも考えずに寝ている。今なにか作ってくる。」

そう言われた銀時はおとなしく布団の中に入る

台所に行き、粥を作り持って行こうとしたときだ

ガラガラ

「今帰ったぞ…小太郎どこにいる…聞いたぞ、吉田の先生がお亡くなりになりに」

なられたそうだな……なにか知っているんじゃないのか？説明しなさい。」

父親が帰ってきた。先生の死…今の自分達にとって1番聞いてほしくないことを聞いてくる

桂：「……………知りません。」

桂父：「とぼけるな、そういえばお前が最近仲良くしていた銀髪

の子供

あいつが先生を殺したという噂だ。」

桂：「銀時が！？」

桂父：「そうだ、そしてその銀髪がこの家にいるとも言われている。」

迷惑な話した。」

桂：「…そんな。」

桂父：「そういえば今だれか来ているのか？なんだ、その粥は」

桂：「これは…。」

桂父：「あの銀髪か…どこの部屋だ。」

桂：「待つてください！父上！！」

桂父：「うるさい！……そうか…お前の部屋だな。」

そう言って部屋に向かう

バンッ！！

勢いよく戸を開ける

2人とも目を見開いた

桂の家で（後書き）

読んでいただきありがとうございました！

桂の父

バン！！

桂の父親が銀時に近づいてくる

そんな親を必死になってとめようとする桂

桂：「待ってください！父上！

銀時は今動ける状態では…」

父親：「そんなこと知らぬ！どけ！

こいつが家に居るだけで周りから気味悪がられるのだぞ
！？

そのような奴追い出してしまうほうがいいに決まってお
ろつ。
」

桂：「父上！今のは言いすぎです！」

父親：「うるさい！」

ドッ
ッ

ドサッ

頬を殴られた

力が強すぎて隣の部屋にまで飛んでしまった

桂：「……ッつ、」

高杉：「おい、大丈夫か!？」

桂：「……ああ。……銀時は……!」

銀時のもとへ行こうと頬を押さえながら立ち上がる

銀時：「うゝ、ぐああああ!!!!!!」

銀時の叫び声が響いた

行ってみると腹を押さえて倒れ込む銀時の姿

すぐそこには桂の父親

父親：「…痛そうだな化け物。もっとしてやろつか…!」

ドカッ

桂：「父上！！もう止めて下さい！！」

銀時：「……ぐッ……がはっ。」

高杉：「銀時！！……いいかげんにしろよ！」

こんななんってのに……やめてくれよ！！」

銀時の腹の部分は刺された傷がひらき赤黒く染まっている

父親：「なぜ止める？先生を殺した化け物だぞ？」

ここで殺しておかなければなるまいよ。」

高杉：「こいつは先生を殺したりしていない！！！」

父親：「たえそうであつたとしてもこの餓鬼が

この村にとって邪魔な存在であることはたしかだ。平和
なこの村に化け物はいらぬ。」

高杉：「……っな！」

桂：「そこまで言う必要はないのでは……いくらなんでも酷過ぎで
す！！！」

父親：「酷い？別によからう。邪魔者は消す、それだけだ。」

口で言っても意味がないことがわかり、2人で片足ずつ掴む、尻餅
をついた

その隙に銀時は必死に立ち上がり、フラフラになりながらも逃げ
ことに成功した

桂と高杉も追いかける

高杉：「銀時の居場所わかんのか!？」

桂：「なにを言っているあそこ以外どこがある」

高杉：「……そりゃそうだ。」

向かう先はただ1つ

焼け落ちた松陽の家

師を想って

松陽の家に先にたどり着いた銀時

そのまま家のすぐ前まで来て地べたに座りこんだ

いくら呼んでも松陽は帰ってこない

助けることが出来なかったと悔やむ自分だけが存在する

自分に名前をくれた人、剣の使い方を教えてくれた、家族の温かさを教えてくれた

初めて自分を人として接してくれた人…言い出したらきりが無い

それだけ大切な人だった…なのに、護れなかった

銀時：「せんせ…なんで俺だけ助かってんだよ…」

先生がいないと……おれ生きてる意味ねえよ……。一緒に逝きたい……。」

消えてしまいそうな声で言う

誰も自分のことを必要としていない

ならば、いつそのこと先生と同じように自分もこの世から消えてし

まおうと

そのまま持っていた刀を抜いて、剣先を自分の胸に向ける

大きく振りかぶり、刺そうとした瞬間、

桂：「銀時！！！」

桂と高杉が来た

高杉：「なにやってんだよ！！こんなことしたら死んじまうじゃねーか！！！」

銀時が手に握っていた刀を高杉が取り上げる

銀時：「……………死にてえんだよ……………」

桂・高杉：「……………え？」

銀時：「死にてえつつつてんだよ……………」

先生死ぬとき…俺、目の前にいたのに…黙ってみてるとしかできなくて…

家が焼け落ちたあとも、村のやつらの言葉が頭から離れない

今でもそうだ先生を殺したのはお前だつて鬼は居場所なんて作っちゃ駄目だつて

わかってる…最初から俺には居場所なんてない作ったところだ

また壊れちまう…こんなふうに思うくらいなら、今ここで死んだほうがいい。」

そう言ったあと、2人は銀時をギュッと抱きしめる

桂：「そこまで自分を責めるな…」

先生を助けることができなかったのは俺達だって同じなんだ。」

高杉：「ああ、それと居場所がないなんて言うんじゃないよ。」

桂：「そうだぞ…まだ俺達がいるではないか。」

銀時：「……………え？」

高杉：「他の奴がなんと言おうがお前のいるべき場所は変わらねーってことだ。」

銀時：「でも、俺といると迷惑かけちまう。」

高杉：「いちいちうるせーな。」

桂：「そうだぞ、今まで通りにしている。」

銀時：「……………うん……………グスッ」

桂：「泣きたいなら泣け。無理をしてかくすことない。」

そう言つて背中をさすってくれる

そんなに優しくされたら涙が止まらなくなる

銀時：「…う、…ぐすつ、うう……わあああ！…！」

今まで溜め込んでいた想いがいつきに溢れ出し、叫ぶように泣く銀時

桂：「独りでよくがんばったな…」

背中をさすりながら優しく言う

高杉：「もう独りで抱え込むなよな。」

頭を撫でる高杉

焼け落ちた家以外はないこの場所で銀髪の泣き声だけが響いていた

決意

桂：「実はだな…銀時。俺と高杉は家をでようと思う。」

泣き止み、落ち着きを取り戻した銀時に言う

銀時：「……………え？」

高杉：「俺は、俺達は…もうあんな家、いたかねえんだよ…」

お前を化け物扱いする親なんかと一緒にいたかねえんだ。

」

銀時：「……………」

黙って話を聞いている銀時

桂：「それに。親だけではない。この村の奴らともだ……………」。

銀時：「…じゃあ聞くけど、家を出てどうするの？」

桂：「それは…」

考え込む桂を見た高杉が

高杉：「そのことなんだが…前に俺、

隠れ家みたいなの作ったことあるんだ…

そこに3人で暮らさないか？飯なら俺が家から盗ってきてやる。」

桂：「本当か！？すまん。」

高杉：「気にすんな。行こうぜ。」

隠れ家に着いた

辺りにはなにもない、人が通る気配もない

3人で暮らすにはちょうどいい場所なのかもしれない

桂：「思っていた以上に広いな…それに、頑丈に作られている。」

高杉：「だろ？」

自慢げにいう

夜が来て高杉が持って来てくれた夕飯を食べ、空を見上げていた

高杉：「……………先生の仇……………とりてえよ。」

高杉が小さな声で呟いた

桂：「俺もだ……先生を殺したのは幕府の連中だろ？」

そいつらを許せるわけがなかるう。天人も、その天人のい
いなりと

なっている幕府も……ぶっ壊してやりたい。」

高杉：「ああ……でも、どうすれば……」

そうだ、……攘夷戦争に参加すればいいんじゃない？」

桂：「攘夷戦争……確かに天人を追い払うということで

この腐った世界も少しはマシになるだろう……」

だが、それで仇をとったといえるのか？」

高杉：「なに言ってるやがる。先生は天人が……いやこの世界が奪つ
ていった

そんな国を少しでもよくするために俺たちが動かない
でどうすんだよ。」

桂：「……それもそうだな。

銀時、お前はもうどうしたいんだ？」

銀時：「……俺は……。」

攘夷戦争とやらに参加すれば、

つねに死と隣り合わせということだ

それがどういふことかは銀時が1番よく知っている

先生の仇をとりたい…この気持ちは銀時も同じだ

だが、先生はそんなこと望んでいるのだろうか…いいや、望んじやいない

それを言ったところでこの2人の気持ちが変わるものなのかわからない

2人だけが戦場に立ち、自分だけのうのと生きるのか、

松陽の教えに背いてでも2人を護るために

自分も同じように戦場に立つのか…

答えは決まっている

銀時：「俺……攘夷戦争に………参加する。」

なにもしないまま目の前で人が死ぬのは…

後悔するのはもうたくさんだ

護れるものがあるなら最後の最後まで戦って、

生き残ってやる

そう魂^{こころ}に決めた銀時^{ぎんぎし}だった

別れ（前書き）

なんかめっちゃくちゃです
すみません

別れ

―5年後―

桂：「銀時！そろそろ出るぞ！」

銀時：「おー。」

やる気のない返事が返ってくる

しばらくすると銀時が出てきた手にはかつて貰った刀

桂：「もう、いいんだな？」

銀時：「ああ。それより早く行かねえとな…」

最後くれえきつちり挨拶しとかねえと…。」

高杉：「1番遅いてめーが言うか？」

銀時：「細かいこと気にすんなって。」

返事を返す気もなくなり、黙って歩きだす

5年前の今日

3人の恩師、吉田松陽が殺された

そして師の仇をとるために攘夷戦争に参加することを決意した

だが、そのときはまだ幼すぎたんだ…

そんなとき、松陽が3人に渡した教本が役にたった

刀の使い方や武士としてのありかた

ほかにもいろいろなことが書かれていた

3人で剣の稽古もした

そして今、

目的地へついた

幸せだったときが消えた場所

大切なものを失くした場所

そう、焼けた松陽の家だ…周りにはとくに建物がない

それもあつてのことなのか家は5年前と全く同じ状態だった

手をあわせた後、桂が話し出した

桂：「先生。短い間でしたが、ありがとうございました。

俺は、先生…あなたを奪ったこの世界が憎いです。

ですが、先生と過ごした日々はとても幸せでした。

本当に…ありがとうございました。」

銀時：「いいのか？」

銀時が問う

桂：「ああ、俺ばかり話していてもな…

それに、最初から言いたい事は1つだけだ

“ありがとう”この言葉を伝えることが出来ただけでいい。

」

銀時：「そっか。次、高杉…話しする？」

高杉：「…そうさせてもらう。」

そう言って高杉が話し出す

高杉：「松陽先生…俺も桂と同じです。

世界が憎くて…今すぐにでもぶっ壊してやりたい

でも、俺にはまだそんな力はない

それに、俺はまだ、皆ではしゃいでたときのこと

忘れられねえ、いいや、忘れたくない。

あなたに教えてもらったことも絶対に忘れません…です

が、

そのことを貫き通すことはできない…ごめんなさい

短い間…ありがとうございました。」

高杉：「悪かったな…長々と…俺達はもういい

あとは、てめーの番だ悔いのないようにな…。

俺達は少し離れたところで待ってっから。」

銀時：「すまねえな。」

高杉：「ああ、気にすんな。じゃ、ゆっくり話せよ。」

そう言っつてその場から立ち去った

それを確認し、話しだす

銀時：「先生…あんたがいなくなってから

変わったことがあるんだ……あいつ等なんだけど

笑ってくれないんだよ……

俺もそう、心から笑った覚えがない

それだけおおきかったんだよ……あんたの存在が

……俺は、あの2人と同じでこの世界が憎い

でも、一緒に過ごした時間も俺にとっては大切な……時間

だった。

また、あのときみたいに戻れたらって思うときもある。

ま、あの2人はそんなこと望んじやいないだろうけどな、

これだけ言わせてくれ、

短い間だったけど、ありがとう

俺はこれからも、俺の武士道^{ルール}で生きていく

もう二度と……あんな思いしたくねえからな……見ててくれよ

……それじゃあな……先生。」

背を向けて歩きだす

目の前に2人の姿が見えた

銀時：「待たせたな。行くか。」

桂：「ああ。」

もう後戻りは出来ない

歩いていると心地よい風がふいた

“ 3人とも、己の魂の信じる道を行きなさい ”

そんな言葉が聞こえたような気がした

戦場

銀時：「なあ、俺等何処向かって歩いてんの？」

村を出て3日間歩き続けていた3人

高杉：「なんだ、知らなかったのか？」

桂：「俺達は今、1番激しい戦いをしている場所に向かっている

そのほうが殺^やりやすいだろうからな。」

銀時：「へー。で、まだなの？」

桂：「もうすぐだ。下を見ればわかるだろう。」

そう、3人の足元には人なのか天人なのかわからない死骸が転がっている

戦場になどたったことのなかった桂と高杉にとっては予想外のことだった

血の臭いだけではなく、死骸からの異臭に吐き気がしたほどだ

銀時が幼いころ、松陽拾われるまでは戦場で生きていたと聞いていたが、

子供１人でこんなところにいることが想像もできない

銀時かというと、久しぶりに立ったこの場所に対して、幸せだったころから

一気に現実へと引き戻されたかのように感じていた

しかも自分だけじゃない、桂や高杉までもが戦場に立っている

それがたまらなく辛かった

２人にはこの地獄を知ることなく、

幸せに生きていてほしかった…

だが、大切な…いや、自分達の全てだとも言えるほどの

存在だった松陽が殺された今、そうもいけなくなった

戦地に辿り着いた３人

偶然にも戦いが終わった後だった…

だが、また数時間かすれば天人が攻めてくるだろう

辺りを見渡し、歩いていると隠れ家のような建物があった

桂：「ここだな、入るぞ。」

中に入り、ここの指揮を執っている者のところまで案内してもらう

攘夷志士：「隊長…ちょっといいですか？」

こいつ等が話しがあるとかで…。」

??：「話し？まだ餓鬼じゃねえか…」

そんな奴の言うことなんざ聞いてらんねえよ

さつさと帰れ、殺されるぞ。」

高杉：「俺たちや餓鬼じゃねえ、ちゃんと刀だって扱える。」

??：「ふっ、どうだか…。」

高杉：「試してやつてもいいんだぜ？」

桂：「高杉！……今はやめろ。」

??：「長髪の野郎はよくわかってるじゃねえか

じゃあこれはわかるよな？…

「ここにいる中で俺達がもつとも気になっているのは、
その銀髪だ。」

なんだお前は……まさか、…天人か！？…斬るぞ」

そう言つて刀を向けられた銀時

銀時「…！？」

一瞬哀しそうな顔をした

それに気づいた桂と高杉は、男に向つて言い返そうとしたときだ

銀時：「違います。俺は、天人じゃない…

俺は、人の子です。」

自分は人間だと、必死に訴える銀時を見て

桂と高杉は悲しくなる

人なのに恨みのある天人と間違われ刀を向けられていることが…

桂：「……銀時……。」

？？：「そんな証拠何処にもない

銀髪に紅い瞳を持つ人間などいるわけがなからう。」

銀時：「そんなつ、」

桂：「さっき天人かと聞かれ刀を抜かれたときの

こいつの顔を見ただろう!?

それを見てよくそんなことが言えたものだな!」

自分の感情を隠すことなく相手にくらいつく

??：「……………それもそうだな。銀時と言ったか…すまなかったな。

だが、俺はまだお前達をここに置き、戦わせるとは言っていない

……………そうだな。代表者を決めてちよつとした試合をするのはどうだ?

勝てばそれなりの腕だ、ここに置いてやるぞ。」

高杉：「その話し本当か!？」

??：「ああ、嘘はつかねえよ。

さ、誰をだす?こちらからは“坂本辰馬”と言う男がいてな、

そいつを出させてもらう。

剣の腕だけはここの隊では1番上かもしれんぞ?」

自慢げに言うだが、3人にとってはどうでもいい話だ…勝てばいいだけのだから

高杉：「おい、こっちは誰が行く？」

銀時：「……俺が…行く……。」

言い出したのは銀時だった

桂：「いいのか？」

銀時：「ああ。」

戦場（後書き）

2章入りました

めちやくちやになることがほとんどかもしれませんが
よろしく願います！

読んでいただきありがとうございます！

試合

??：「準備は出来たようだな。」

試合をすることになった銀時は動きやすい格好でということであ
胴着を渡され、着替え終わったところだ

銀時「ああ。そーいや、武器はどーすりゃいい?」

??：「こちらで用意させてもらおう。道場に行くぞ。」

銀時：「へえ、こんなところにそんなんもあんのか。」

??：「ま、小さいとこだがな。」

そんなことを言っているうちに道場に着いた

中に入ると20人以上の者がいた

自分の容姿を見てざわつく連中もいたが気にならない

桂：「銀時。」

桂と高杉が近づいてきた

銀時：「なに?」

桂：「相手は今、この戦場^{はしや}で戦い抜いてきた者だ

無茶はするなよ。」

銀時：「ああ。」

??：「おい！こっちへこい！」

銀時：「わあったよ…じゃ、行ってくるわ。」

そう言って呼ばれた男のほうへ歩いていった

??：「ほらよ、これを使え。」

銀時：「木刀か…。」

??：「そうだ。坂本の奴も直、姿を見せるだろう。」

今のうちに防具をつけておけ。」

そう言われ、付けようとしたときだ

入り口の辺りが騒がしくなってきた

銀時：「……………？」

スウッと襖が開き、入ってきてすぐ

長身で銀時よりうねりのある黒髪の男、坂本が近づいてきた

正座をしていた銀時と目を合わせるかのように膝をつき、

ジイーッと銀時の顔をみている

銀時：「……………なに？」

たまらず声をかける銀時

すると、思いもよらない言葉が飛んできた

坂本：「まっこと綺麗な瞳と髪じゃの」

銀時：「……………は？」

気味悪がられると思っていた銀時だったが、

それと正反対のことを言われたためか、なんて返事をしたらいいのか

わからなくなった

??：「坂本！さっさと防具をつけろ！」

坂本：「わかつちよるきに」

2人とも防具をつけて向き合い、木刀を構える

「始め!!」

その声と同時に動く

カン カンッ

攘夷志士：「あの銀髪やるじゃねえか…」

辰馬さんと互角…いや、辰馬さんがおされてる!？」

攘夷志士A：「ああ、早いうちにでも勝負がつくかもな。」

カン カンッ

五分後、一瞬だが銀時の隙ができた

坂本はそこを見逃すことなく狙う

カンッ!!!

坂本の木刀が宙を舞った

周りにいたもの、坂本自身なにがおきたのかわかっていないようだ
それもそのはず

そのとき銀時はわざと隙をみせ、一瞬で相手が狙ってくるところを
予想し、

持っていた木刀をはじき飛ばしたのだ

銀時：「…ふう、…審判！どうなったの？」

「…しよ、勝負あり！！」

銀時の勝利という形で試合終了となった

終了後

試合が終わった

隊長と呼ばれていた男が拍手しながら

銀時や桂、高杉のところまで歩いてきた

???：「予想以上の腕だ。」

坂本に勝つとはな…約束通り、ここで戦うことを許可してやる。

俺の名は“久坂玄瑞”。お前達の名は？」

桂：「桂小太郎。」

高杉：「高杉晋助だ。」

銀時：「……銀時。」

久坂：「……？苗字はなんだ？」

銀時：「そんなもんなっ」

桂：「吉田です。こいつの名は吉田銀時です。」

銀時の言葉を遮るように言った

久坂：「…そうか…3人とも良き名だ。

いきなりだがお前達のこれからの生活についてだ、聞いてくれ

ろ…
食事に関しては全て用意してやる。部屋も空いているところ

いる
まあ狭いが好きに使ってくれ、細かいことはそこでバテて

坂本に聞くといい。馬鹿だが面倒見はいいやつだ。

それから、服はの中から選べ。

動きやすいものばかりだが、着る色をよく考えて選ぶことだ。」

桂：「ああ、いろいろすまない。」

勝：「気にするな、じゃあな。」

桂と高杉が服を選んでいるとき、銀時は坂本のところにいた

銀時に気づいた坂本は

坂本：「わしの完敗じゃ、おんしなかなかりよあの。」

笑いながら言う

銀時：「別に…あんたのほうこそすげーよ…負けちまうかと思っ
た。」

坂本：「あはははは、そーいや自己紹介がまだじゃったの、

わしは坂本辰馬。おんしの名ば教えてくれんか？」

銀時：「……銀時だ。」

坂本：「苗字はなんかが？」

銀時：「……ない。」

坂本：「……そうか、じゃあ金時！早く服選んで部屋に行くき
に！」

銀時：「あのー金じゃなくて銀時なんだけど。ま、別にいいか。」

ボソボソと訂正を入れ、服を選びに

桂達のいるところへと走って行った

終了後（後書き）

久坂玄瑞です。。。。

本作には西郷さん、高杉、桂といるわけですから
久坂玄瑞がいてもいいかなと思ってまして…

ちゃんと意味はあるんです！

それは後ほど本編で書かせていただきます！

ありがとうございました！

過去の人

服を選び終わり、部屋に案内してもらった

坂本：「ここが今日からおんしらの部屋じゃ

少し狭いかもしれんが一部屋3人で我慢してくれんか？

怪我人のために部屋を開けておかねばならんきい。」

桂：「いや、こちらこそすまないな。

それと、自己紹介が遅れてしまった、

俺は桂小太郎、こっちは……」

高杉：「高杉晋助だ。よろしく頼む。」

坂本：「高杉に……ッラ……だったかのお？」

桂：「いや、桂だ！」

高杉：「くつくつく、いいじゃねえかッラあ。」

桂：「高杉！お前まで言うか……！」

銀時：「落ち着けよ、ッラ。」

坂本：「あり？ツラじゃなかったか？」

高杉：「いや、ツラで結構だ。」

おかしそつに笑いながら坂本に告げる高杉

坂本：「そうか、そうか。」

じゃ、しばらくゆつくりしてくれてかまわんきいの、

飯の時間になったらまた呼びにくるぜよ。」

桂：「……ああ。」

坂本が去って行くのを確認すると、桂が銀時に話した

桂：「なぜ、苗字を名乗らなかった。」

銀時：「……名乗れるわけねえじゃねーか。」

先生護ることもできずに、天人殺して仇とろうとしてる
俺なんかが……

こんな国でも1つにしようと頑張ってた先生の気持ちと
は裏腹に、

全て壊そうとしてる俺なんかが……名乗る資格すら

ねえよ。」

桂：「銀時……………」

高杉：「……………」

桂：「…銀時、そんなに自分を責めるな。」

先生を護れなかったのは俺達だって同じなんだぞ？」

銀時：「でも、俺はすぐ近くにいたのに…。」

高杉：「もういい。」

高杉がぎゅっと銀時を抱きしめる

銀時：「…………？」

高杉：「先生はもういない…だがな銀時。」

お前が吉田って名を捨てなきゃならないわけじゃねーだろ

血は繋がってなくても、てめーは先生の息子なんだから。

「

銀時：「…………し…すけ…。」

静かに涙を流す銀時

それを抱きしめ、背中をさする高杉

銀色の頭をそつと撫でる桂

師を亡くしてからは兄弟のように育ってきた3人は

ずっと5年前の悲しみから逃れられないでいた

だが、それより辛く、哀しい現実を彼等はまだ知らないでいる

過去の人（後書き）

ありがとうございました！！

坂本の話し方がよくわかりません……。。

白い着物

朝になった

昨日はあの後、坂本が食事を持ってやってきた

それを食べ終わり、すぐに布団を敷き横になる

今までの疲れもあつてのことだろう3人ともすぐに眠りの中へと落ちていった

そして今

銀時たちは坂本が持ってきてくれた食事を済まし、貰った服を着る

桂は目立ちにくい深緑の着物を

高杉は袖の部分が締まっている黒い着物、

そして銀時は真っ白な着物を…

高杉と桂はこの色を見たとき着ることに反対した

敵をひきつける劣りにしかないからだ

それでも銀時は白を着ると言い張った

言うことを聞かない銀時を見た桂は、

『絶対に死なんと約束しろ、それを守ることができののなら着るがいい。』

そう言うて着ることを許してしまったのだ

いまだ納得のいかない高杉はさておき、今いる部屋をでて

3人で久坂の部屋へ向っている

今日の動きを確認するためだ

坂本が、1日の動きを知りたいなら指揮をとっている久坂に聞くといい

と言っていたからだ、それに、桂は久坂にも見てほしかったのだ銀時の着物を

桂：「失礼します。」

久坂：「なんだ、なにかあったのか？」

桂：「はい。今日1日、何処でどう動けばいいかわからなくて。」

久坂：「そのことが、それに関しては心配するな、

これからは坂本に着いて行くといい、そのほうがいいだろう。

それよりも、銀時、その服の色で行くつもりか？」

銀時：「ああ。」

久坂：「お前が何を着ていようが構わん、だがな、それなりの覚悟はしておけよ。」

銀時：「わーってるよ。」

白い着物（後書き）

短いですね…

すみません！

最初の戦い（前書き）

明日から3日間ほど投稿することが出来ません。
すみません。

最初の戦い

坂本に着いて行くことになった3人は戦場に立っていた

辺りが殺気でピリピリとした空気に包まれていた

桂：「いよいよか……」

高杉：「ああ。」

銀時：「……。」

「来たぞ！」

1人が叫んだ

周りにいた者たちは天人がくる方向を確認し刀を抜いた

久坂：「どんな状況に陥っても絶対に気をぬくな！」

死ぬ覚悟ではなく生き抜く覚悟を決めろ！

ここにいた全員が無事帰ってこれることを願っている！

行くぞお！てめーらあああ……！！！！！！」

「うおおおおおおお！……！」

久坂の言葉で一気に攻めて行く

ガキイイイイイイン

グザッ

「があああああ！……！！！」

ブシャアアアア

あちこちで人や天人が倒れていく、もがき苦しむ声が響く

桂と高杉のことを気にしながらも敵を斬っていく銀時

周りを気にする余裕がなく、敵を斬ることだけに集中している桂と高杉

攘夷志士：「ぐっ、いてえ……！！」

銀時のすぐ後ろからそんな声が聞こえた

銀時は振り返り、声の主を確認する

男を見つけた銀時は寄って来る天人を斬り倒しながら

うずくまっていた男のもとへ駆け寄った

天人はその男が死んでいるものだと思っているのか

それとも死にかけている人間にはようがないのか

どちらにせよ、銀時は自分が気づく前に殺されず済んでよかったと思っ
た

銀時：「おい！しっかりしろ！！」

意識が薄れているのであろう男に必死で叫ぶ銀時

攘夷志士：「……………だ…れた？」

なんとか意識が戻り、今の状態を理解した男は小さな声で銀時に言った

銀時：「昨日ここに来た銀時だ！」

大丈夫…じゃねえな、もう少しだ、死ぬなよ！？

絶対助けてやるから！！！！」

向ってくる天人をただひたすらに倒していく

攘夷志士：「おれを……たす……ける、だと？

ははっ、……も、ておく……れだよ……ゲホッ、ガハッ。」

銀時：「なに言ってるんだよ！！あとちょっとだから！」

攘夷志士：「……わるい……もう……げ……かい……だ……。」

銀時：「おい！しっかりしろ！！」

攘夷志士：「……………」

銀時：「おいおい、嘘だろ？」

銀時は自分の周りにいた天人を全て倒したあと、男に近づいた

銀時：「……しんでる……。」

冷たくなってしまった頬を撫でる

男は眠るようにして死んでいったのだ

そんななか、攻めてきた天人の大將が殺されたのだろう

逃げ帰る者が現れはじめた

これはチャンスだと背を見せ逃げていく天人を斬りまくる

「はあ、はあ。」

久坂：「退いたようだな、よく聞けよ！帰ってから作戦会議を開く！」

すぐに道場に集まるように！それから、まだ生きている奴は

見捨てることなく連れて帰ってこい！！」

「はい！！」

久坂の言われた通り、怪我をしているものも皆、歩けない者に肩を貸し帰った

銀時はさっき死んだ男を背負っていた

桂：「銀時？その男は」

銀時：「…墓…つくる。」

高杉：「墓？」

銀時：「絶対助けるって言ったのに…また、なにもできなかった。」

坂本：「そう思うのはみんな同じじゃ！」

助けたいと思うんじゃない、久坂みたくデカイ人間になるぜよ！」

桂：「坂本…。」

銀時：「……………おれは…どうしたらいい？」

坂本：「…護りたいもののために剣を振ればいいだけの話じゃき。」

銀時は優しいからの、きつと出来るきに。」

優しく笑い、銀時の頭を撫でる

その後、4人で男の墓をつくり、隠れ家に帰った

3人の最初の戦いはこうして幕を閉じたのだった

最初の戦い（後書き）

銀ちゃんばっかになってしまいました…。
いろいろとすみません！

会議

隠れ家に着き、返り血でいっぱいになった服を脱ぎ、

着流しに着替えてから道場に向かう

久坂：「全員揃ったな、会議を始める。」

銀時や小太郎に晋助は初めてだったな、

ほぼ毎日こうして集まる時間をつくりそのときに天人の動きを予想したり

次の作戦を立てたりしているんだ。傷を負ってここにこない奴には

だいたいの内容を伝えてやれば問題ない。

それでは、本題に入ろう。

今回の戦いに関して誰か意見するものはいないか？

なければ今のやり方でいこうと思うのだが。」

坂本：「わしは今までのでいいと思うぜよ。」

桂：「今までのやり方とは？」

ずっと黙っていた桂が坂本に尋ねた

久坂：「なんだ。言ってなかったのか？」

坂本：「おお、そういわれると…」

簡単に言うんじゃな、それぞれ固まりになってこの隠れ家を中心に

東西南北の4つに分かれる、そうすれば天人がここに近づくと

ができなくなるからの。それに、天人はどこから来るか予想はできても

実際のところ誰もわからんきい、だから今日みたいな戦い方が1番じゃと

わしは思うちよるんじゃが…。」

説明しながらも自分の意見を述べた坂本を見て3人もうなずく

桂：「なるほど。」

高杉：「わかりやすくいいじゃねえか。」

久坂：「なら、またとうぶんの間これでいかせてもらう

ただ、この3人を何処の固まりに入れる？

3人とも初めてのわりにはいい動きをしていた

足手まといと思う奴はいないだろう。」

坂本：「それなら3人ともわしのところに来てもらってもいいが
か？」

久坂：「3人ともか？」

坂本：「そうじゃ、今1番人数が少ないのはわしのところじゃ
きの、

それに、最初のうちは不安になることもあるんじゃないが
か？」

久坂：「……そうだな。なら3人はとうぶんの間

坂本と一緒に行動しろ。いいな？」

桂：「ああ。いろいろとすまない。」

久坂：「そう固くなるな。普段通りでいいんだ。」

桂：「しかし……。」

銀時：「じゃあ、そうさせてもらおうわ久坂。」

桂：「ちょ、銀時!!」

久坂：「はははっ、そうそう、それでいいんだ。」

じゃ、今日の会議はここまでだ。飯当番の奴は急いで準備してくれ!」

「はい!!--」

坂本：「あ、そうやあ今日わしらの当番じゃったきに

銀時にヅラに晋助。飯の準備もするから手伝ってくれんか?」

銀時：「別にいいけど、当番制なんだ。」

坂本：「そうなんじゃ。ま、行ってみりゃわかるきに。」

桂：「坂本殿、ヅラじゃない桂だ。」

坂本>「そうじゃったの」

すまんかったの。あと、その坂本殿ってのやめんか?辰馬でいいき。」

桂「…じ、じゃあ…坂本。」

桂がそういうとニカツと笑いながら

坂本：「それでいいきに、じゃ、飯つくりに行くぜよ!」

「ああ!」

そう言って4人は台所のほうへ向かって歩いていった

会議（後書き）

明日からまた1週間ほど投稿することができません

屋根の上（前書き）

1週間ぶりです！！

テストだったんですが終わったあとの開放感がもう……！！！！！！

そんなわけで今日からまた投稿していきます。
よろしくお願いします！

屋根の上

夕飯を食べ終えた3人は部屋にいた

高杉：「…昼間の空はあんなにも暗く見えたってえのに

夜の空は…なんも変わらねえんだな。」

桂：「……………そうだな…。」

返事を返すがこれ以上話す気もしないのだろう、また静かになる

だが、それも一瞬のこと、坂本がやって来たのだ

坂本：「おお、いたいた。なにやつとるんじゃこんな部屋で。」

銀時：「…そつちこそ、なにしに来たんだよ。」

銀時がめんどくさそうに聞く

坂本：「そんな顔するな、3人とも暇じゃろうて、一緒に飲まんか？」

そう言つて手に持っていた瓶を見せる

桂：「飲むってここですか？」

銀時たちの居る部屋は狭くもないが広いわけでもない

坂本：「いや、ここじゃちいと狭いからの、いい場所教えちやる。」

銀時：「いい場所？」

坂本：「ここより広うて月がよう見える場所じゃ。」

高杉：「ほお、面白そうだな。いいぜ、付き合つてやるよ。」

銀時：「じゃあ俺も、どうせ暇だし。ヅラは？行かねえのか？」

2人は立ち上がり桂のほうを見る

渋々立ち上がる

桂：「銀時、俺はヅラじゃない、桂だ。……今晚だけだぞ。」

坂本：「ほんとか！？じゃあ行くぜよ！」

坂本：「ここじゃ、転がらんよう気をつけるき。」

銀時：「ああ、ってゆーか…ここって、ただ屋根上っただけじゃん！！！」

坂本：「ただ上っただけじゃないきに！ここの下は人の通りも少なくて

おまんらの部屋よりも広い、空もよう見える。

この戦場で唯一の自由にできる場所じゃ！」

桂：「そうか、しかしこの場所を知っているのはお前だけじゃないのだろう？」

坂本：「いや、わしとおまんら3人以外でこの場所を知っとる奴は1人だけじゃ。」

高杉：「誰なんだ？」

坂本：「わしに聞くより自分で確かめて見ればいいき。」

高杉：「…んだよそれ。まあいい、

こんな人気のないとこにわざわざ連れてきたんだ。

酒飲むためだけじゃねえってんだろ？さっさと話しちま

えよ。」

坂本：「……じゃあ、飲む前に少しだけ言いたいことがあったの。

おんしら3人…いや、2人とも、憎しみだけでこの戦場
生き残れると

本気で思っ取るんか？…わしから見たら銀時だけ憎しみ

とは別の

思いがあるように見える。」

桂：「いきなり、なにを……」

坂本：「銀時の戦い方を見させてもらったが、おんしらよりも集中力もある

敵をただ斬っていくだけじゃない、急所を正確に狙い倒しているようにな。

それに比べて2人は斬ることにしか目がいつておらん。

だから殺しきれてないんじゃない。戦に出ているいじょう、敵を

生かしたままにしておくことは絶対にできん。

向かってくる敵がどう動くかを考え倒す必要があるんじゃない。

今のままじゃと、なにも出来ずにただ死ぬだけじゃ。

国を護るために、天人追い払うためにここに来たんじゃろ？

それなら、もうちつと冷静になれ。」

桂：「……確かに、坂本の言う通りだ。」

だが、何故そのようなことを言う？坂本にとっては俺達が死のうと

どうでもいい話だろう。」

坂本：「…どうでもいいと思うておったらこんな話しぢやらん。

わしとて1人の人間じゃ、仲間が死ぬところはみとうない。」

桂：「……………」

坂本：「暗い話しはここまでじゃ！3人とも飲め飲め。」

さっきまでの空気が嘘のように坂本は笑って酒を注ぎ始めた

銀時：「わっ、ちよっ、零しちゃうじゃねえか！！」

坂本：「気にするな！明日からまた戦じゃ！今だけでも笑っとけ
あははは。」

高杉：「笑うのは勝手だが声でけえよ…。」

そっついながらも4人は明け方までその場所にいた

屋根の上（後書き）

読んでいただきありがとうございました！

白夜叉（前書き）

かなり進んでいます。

なんかすいません

白夜叉

―その男、銀色の髪に血を浴び、戦場を駆る姿はまさしく―

―夜叉―

銀時が此処に来て一月が経つ。

天人もそれほど大きな動きを見せることなく、ただ時だけが過ぎていた

変わったことといえばただひとつ。

血を浴びた夜叉と呼ばれ始めたのはいつだったか……“白夜叉”

味方であるもの達も銀時のことを恐ろしいという目で見えるようになっていった

タッタッタッタ

銀時が向かうのは一月前坂本に教えてもらったあの屋根の上だ

「おい、今の白夜叉じゃないのか？」

「やばいぞ、なんだよあの髪と瞳人^めじゃねえよ。目え合ったら殺されるぞ。」

誰かとすれ違ったびそんな声が聞こえてくる

銀時はそれを避けるようになるべく人が通らない道を通りその場所へ来た

聞きなれた、“銀時”と、

この場所で“夜叉”と呼ばずに接してくれる4人の声が聞こえてきた

桂に高杉に坂本、そして久坂がいて、すでに飲んでいた

久坂は2週間ほど前この場所に來た

もともとこの場所は久坂が坂本に教えた場所だったそうだ

たまに2人で静かに酒を飲み、これからのことの話をしていたら
しいが、

坂本が3人を連れてきたことによって、にぎやかなものへと変わっ
ていった

坂本は、最初は悪いことをしたなどと言って謝っていたが、

久坂は、自分も銀時たちともっと話しをしてみたかったんだと笑っ
て言ってくれた

桂：「遅かったではないか。なにかあったのか？」

銀時：「いや、着替えてきただけ……。」

桂：「ならいい。」

銀時は久坂の隣に座り、酒をちびちび飲み始める

それから数時間が経ち、銀時と久坂以外の3人は朝が早いからと部
屋に戻っていった

銀時はもう少しだけ月を見ていたいとここに残った、久坂も同じだ

銀時：「……なんで残ったの？」

久坂：「ん？銀時と同じで俺も空を見ていたい……だめか？」

銀時：「……いや……。」

久坂：「なら、いいだろう。今ならお前の気持ち聞いてやらんこともない。」

銀時：「なにいつて、」

久坂：「誤魔化そうとするな、お前が白夜叉と言われていることは皆知ってる。」

もちろん、あの3人もな。」

銀時：「……。」

久坂：「俺のもうひとつの名前、教えてやろうか？」

銀時：「……え？」

久坂：「鬼神」

天人はよくこの名を口にする。ま、お前と違って仲間からは久坂と

呼ばれちゃいるが、鬼と思っている奴は多いかもな。

夜叉と呼ばれ周りから突き放されたとしても、俺や、辰馬、小太郎や晋助は

お前の味方だ。それだけは忘れるな。今は話す気がないだろうからな。

また、話したくなったらいつでも声かけてくれ。じゃあな。」

そう言って久坂は立ち上がり、背を向けて歩きだしたが

急に立ち止まり、振り向かずに話し出した

久坂：「おっと、言い忘れてたことがある。

白夜叉という名が広まったことによって天人達が

集中的にお前に攻撃してくるだろう。もちろん、

幕府側にも情報は少なからず入っているはずだ。そうなる、と、

もう後戻りはできんぞ、お前達3人が何故こんなところに来たのかは

知らん、正直聞きたい気持ちもあるがな。

…とにかくだ、今のお前はいつ殺されてもおかしくない。

それなりの覚悟はしておけよ。」

銀時：「ああ、………また……機会があつたら話す。」

俺達がここに来るまでの話とか……。」

久坂：「………ああ。」

屋根から飛び降り、部屋に帰っていった

白夜又…自分が好きに暴れ、天人を殺しているのは確かだ

だが、銀時自身剣を振ることに抵抗を感じていた

本当は敵であつたとしても殺したくない

苦しんでいるなら助けてやりたいと思うが、

銀時にそんな力はない

ただ今生きているこの時代の波に流されていくことしかできないのだ

そんな自分が憎かった

だから、せめて仲間だけでも、少しでも生き残ることができるようにと

自分は戦場では目立つ真っ白の着物を着て、敵をひきつけるためのおとりとなり

必死に戦った…なのに、そこまでの思いをしてきたというのに

仲間から怖がられる…それが辛かった

だが、久坂は味方だと言ってくれた

白夜叉ではなく銀時と言ってくれた

それだけで十分だと銀時は想っていた

戦いの日々（前書き）

戦いの日々

数日後、銀時達は北の方角で戦っていた

天人が凄い勢いで攻めてくる

2、3日前、坂本は快援隊という組織をつくった

馬鹿だが強くて仲間思いという優しい面もあつてのことが

仲間はすぐに集まった

とは言つても100人もいない

これから少しずつ増やしていくんだといっている

「うおおおおおおお！！！！！！」

ガキイイイイイイン

高杉：「くそっ！今日なんか多くねえか！？」

桂：「気のせいだ！！一気に潰すぞ！！」

高杉：「わあってらあ！！」

ブシュッ

坂本：「突撃じゃあああああ！！！！！！！！一氣にいくぜよ！！！」

「はあああ！！」

グヂャツ

「わあああ！助けてくれえええ！」

「死ねえええ！！」

ザ
シ
ユ
ツ

「白夜叉あああああ！！！！！！！！」

銀時に向かつていった天人もたくさんいたが、皆一瞬で倒される

だが、攻撃が止まることはない

銀時：「なんか俺だけ天人の数多くない!？」

高杉：「知るかよ！いらねえならよこせ！ぶった切つてやる！」

そう、さきほどから明らかに銀時のほうが敵の数が多い

白夜叉という名前のせいでもあるのだろう

銀時：「変われんなら変わってくれっての！！」

坂本：「金時もすっかり人気じゃの〜。」

銀時：「なに人事みてえに言ってるんだ！つか金時ってなんだよ！

なんで今間違えんの！？今まで普通に銀時って言ってたじゃん！！」

叫ぶように言い放ち、斬り続ける

それから数分後、敵の数もかなり減ってきた

坂本：「もう一息じゃ！行くぜよ！！！！」

「らあああああ！！」

お互いが意地の張り合いのようなものになっている

無傷の者など誰もいない

肩で息をしている者も、座り込んでしまったものも

一気に攻めていく、桂や高杉もそうだ

銀時も肩で息をしながらも剣を振るった

「白夜叉あああ！覚悟！！」

ガキイイイイン

ガチガチと音がする

罅迫り合いの状態になってしまった

ここで時間を無駄にすることはできないので、銀時は一瞬の間を
いて

天人と距離をとり、急所を突く

再び向かってくる天人を斬りに行こうとしたとき、足元に転がって
いた死骸に

足を滑らせてしまった

銀時：「なっ！？（ヤベ！斬られる！！）」

そう思ったときはもう遅く、天人は銀時の目の前まで来ていた

「獲ったああああ！！！！白夜叉ああああ！！！！」

ブシアアアアアアアッ

支えあつ（前書き）

短いです。ごめんなさい。

支えあう

ドシヤアアアア

その場倒れて動かない銀時

銀時を斬った天人は死んだと思い込んでいる

「白夜叉を倒したアアアア！！！」

桂：「……！？」

高杉：「あの野郎なに言ってたんだ！？」

坂本：「…銀時がか！？」

3人の顔色が変わる、叫んでいる天人を1番近くにいた桂が叩き潰す
倒れていた銀時を見つけ、駆け寄り、抱き起こす

桂：「おい、銀時！しっかりしろ！！」

頬を叩いてみるが返事が返ってくることはない

少し遅れて高杉と坂本が来た

高杉：「大丈夫か！？」

桂：「そんなわけがなろう！完全に意識を失っている。

斬られたところが思ったより深い。早く手当てせねば。」

坂本：「じゃあ、ツラは銀時を見とつてくれ、わしと高杉の2人で残り

片付けてくるき。」

高杉：「ああ、さつさと終わらせて帰らねえとな。」

桂：「頼んだぞ。」

坂本：「わかつちよる。」

そう言つて戦いの中へ戻つていった2人は数分で帰つてきた

桂：「早かつたではないか。無事でなによりだ。」

高杉：「そつちも応急処置くらいはすんだみてえだな。」

桂：「ああ、だが急がなければ…。」

桂が銀時を持ち上げようとすると、自分より重い銀時が急に軽くなつたのを感じた

桂：「…坂本…。」

坂本：「ヅラがあそこまで運んでいくにはちいとばかり無理があるじゃろ。」

わしが先に行って久坂にでも見てもらうき。」

桂：「…すまん。」

坂本：「なあに、お安い御用じゃ。」

二カつと笑いながら坂本は急ぎ足で帰っていった

桂：「さて、帰るとするか。」

高杉：「そうだな。」

2人は倒れている仲間を起こし、肩を貸して歩いていった

手当て（前書き）

なぜだかわかりませんが、

もの凄く眠いです。

手当て

坂本が隠れ家へと戻ると、久坂が仲間の手当てをしているのが見えた。坂本が帰ったことに気づいた久坂は自分のやるべきことを一通り終わらせ、

仲間に指示をし、近づいてきた

久坂：「無事だったか！！あの3人はどうした？」

坂本：「ゾラと高杉は仲間連れて帰ってくるきに、

ま、今は話ている暇ないぜよ。せなかの銀時見てやってくれんのか？」

そう言われた久坂は坂本が背負っていた者が銀時だと気づいた

久坂：「！？……わかった、ここはもう人が多すぎる、俺の部屋に運ぼう。」

坂本：「ここはほったらかしてもいいかや？」

久坂：「ああ、だいたいのは終わっている。あとは残っている奴等で

なんとかしてくれるさ。」

部屋に入り、予備に置いてあった布団を敷き、銀時を寝かせる

久坂：「坂本、手ぬぐいと、水、それから包帯を持ってきてもらえるか？」

坂本：「ちよつとまつとれ。今とつてくるき。」

坂本が部屋を出て行くと、久坂はすぐに準備を始める

服を脱がし、止血のため巻かれていた布を解く

久坂：「……………ひでえな……。」

あまりの傷にそんな声を漏らした

坂本：「入るぜよ。」

坂本の声だ

久坂：「…ああ、入れ。」

静かに入ってくる

坂本：「どんな感じじゃ？」

久坂：「ひでえなんてもんじゃねえ。こんな餓鬼がよく生きてい

たもんだ。」

そう言つて久坂は銀時の身体を拭き、包帯を巻き始める

傷口から出た熱のせいで苦しそうに息をする銀時

そんな銀時の額に濡れた手ぬぐいを乗せてやる

バタバタと音がする

坂本：「なにごとかが？」

久坂：「…小太郎に晋助だな…。」

ボソつと呟く

桂・高杉：「銀時!!」

久坂の予想が当たったようだ

着替えを済ました2人が銀時を心配して探しに来たのだろう

久坂：「静かにしろ。大丈夫だ、傷は酷かったからな、当分の間、俺が看病する。」

2人は時間があるときに顔見に来てやつてくれ。ただし、今日は帰れ。」

高杉：「んでだよ。」

久坂：「今包帯を巻き終わったところでな。2人も疲れてるだろう？」

今日はゆっくり休め。」

高杉：「…ツチ。」

機嫌が悪そうな顔をした高杉が自分の部屋へと消えていった

桂：「いろいろすまなかった。銀時を頼むぞ。」

そう言つて桂は高杉を追いかけていった

銀時：「……………んっ……………」

久坂：「銀時？」

声を掛けてみた

ほんの少しだが目を開いている

だが、焦点が定まっていなかった

かすかだが口が動いているように見えた

耳を近づけてみると、途切れ途切れだが聞き取ることができた

「先生、死なないで」「俺を独りにしないで」と……………

それだけ言つとまた眠りのなかへと落ちていった

先生とはいったい誰なのか、3人にはいったいなにがあったのか

疑問に思っていた久坂だった

目覚め

次の日の朝になった

銀時の熱も少しは治まったようだ

額に乗っていた手ぬぐいを水で冷やし、また乗せる

銀時：「……くさか……？」

銀時が目覚めました

久坂：「起きたか？大丈夫か？……ってそんなわけねえよな。」

久坂は銀時の様子を窺いながらも話しかけた

銀時：「…なあ、俺なんでこんなところで寝てんの？」

自分の状態がよくわかっていないようだったので久坂は自分が昨日、

坂本に聞いたことを話した

銀時：「そうだったんだ…。迷惑かけたな。」

久坂：「そうへこむな。待ってる、今なんか食べるもん持ってきてやる。」

そう言つて立ち上がろうとしたとき、着物の袖の部分をつかまれたような気がした

久坂：「銀時？どうした、どこか痛むのか？」

そう尋ねると銀時は小さく首を左右に振り、小さな声で言った

銀時：「もう少しだけここにいて……。」

身体の調子が悪いからなのか、いつも以上に素直な銀時を見た久坂は嬉しかった

思っていることは口にするくせに自分の気持ちまではなかなか言ってくれないからだ

久坂：「ああ、もうすぐ小太郎と晋助が来るだろうから、

それまではここに居てやる。」

銀時：「…うん。…ありがとな。」

とくに話をするわけでもないが、久坂は銀時の隣にいた

銀時は安心したのか眠ってる、それからしばらくのこと、

桂：「久坂…いるのか？」

久坂：「ああ。入りな。」

スウッと桂と高杉が入ってきた

銀時：「こたろ…しんすけ…。」

2人が来て目を覚ましたらしい

横に座った2人をジッと見つめる

桂：「安心しろ、ここにいるぞ。傷の具合はどうだ？」

銀時：「…よくわかんね。」

桂：「そうか。」

―数分後―

久坂：「銀時、俺はなんか食べるもん持ってくるからじっとしとけよ。」

そう言って部屋から出て行ってしまった

しばらくして、久坂が戻ってきた

久坂：「できたぞ。2人も食べえ！どうせなにも食べずに飛び出してきたんだろ？」

久坂は自分の作ったおにぎりを差し出した

高杉：「俺等の分まで…わりいな。ありがたくいただくぜ。」

2人揃って口一杯にほおばる

久坂：「うまいか？」

桂：「ああ。」

久坂：「ぞりやなによりだ、じゃ、俺は戦出てくるから、銀時の看病よろしくな。」

もちろん、帰ってきた奴の手当てもだぞ。」

高杉：「俺等はでなくてもいいのか？」

久坂：「ああ、昨日の疲れも残ってるだろ？今日はゆっくり休め

俺が帰ってきて、会議が終わったあと、少し聞きたいことがあるんだが…。」

高杉：「話し？まあいつでもいいぜ。」

久坂：「わかった。じゃ、いつてくらあ。ジッとしてるよ銀時！」

銀時：「わあってるよ。だいたい俺今動ける状態じゃねえし。」

久坂：「そうだったな。」

二力つと笑いながら出ていった

金平糖

夕方ごろ、広間の方はいつもの如くバタバタとしていた
帰ってきた者達の手当てのためだ

「うつ、くそ…!!」

桂：「包帯が足りん！誰か貸してくれ!!」

高杉：「こつちもだ！」

久坂の頼みで残った2人も今はかなり忙しい

久坂：「やってるやってる、悪いな2人とも！」

桂：「いや…無事でなによりだ。」

久坂：「辰馬もな。」

ガツと隣にいた坂本と肩を組む

坂本：「そう簡単に死なんぜよ！ところで銀時の様子はどうじゃ
？」

桂：「ああ、熱も治まった。今は眠っている。」

坂本：「そうか。」

久坂：「おい！坂本！動ける奴集めてくれ！会議始めるぞ！

じゃ、2人はここを頼んだぞ。」

そう言つて2人とも道場へと姿を消した

桂と高杉は手当てが終わり、銀時の眠っている部屋へ向かった

桂：「待たせたな、少し早いが粥を持ってきた。」

銀時：「…めんどくせえ。」

すでに起きていた銀時は食べたくないと言つた中にもぐりこんだ

桂：「なにを子供みたいなことを…。」

呆れたように言う

高杉：「おい、銀時。飯食つたらこれやるよ。」

高杉が布団の中でもぞもぞしている銀時の前に手をやり、持っている物を見せる

桂：「これは？」

銀時も気になっていたらしい、顔を出して高杉が置いたものを見る

高杉：「金平糖だ。さつき貰った。」

ガバッ

銀時：「マジでか!!くれ!!」

桂：「さきに飯を食え馬鹿者!!!!」

銀時：「ちっ、わあったよ。」

桂の持ってきた食事を食べ終えた銀時は高杉が持っていた金平糖を食べていた

桂：「甘味はよく食べるな。」

銀時：「だってうめえじゃん。食べる?」

桂：「いや、今はいい。」

銀時：「そ?」

久坂：「随分と機嫌がいいな、銀時。」

銀時：「久坂じゃん、おかえり。」

坂本：「わしもいるきに!!」

銀時：「あ、この間はここまで運んでくれたんだって？ありがとう。」

坂本：「礼なんていいきに。」

二カつと笑う

高杉：「…盛り上がってるとこ悪いが、話があるんだろ？」

久坂：「そうだった。実はだな、銀時が運ばれてきたときに、

手当てのために服を脱がすだろ、その服の中にある物が入ってたんだ」

銀時：「…これ…。」

久坂が差し出したもの、それは、かつての恩師である吉田松陽が銀時達に贈った物

教本と手紙だった

久坂：「銀時。俺はこの本に書いてある字に見覚えがある

これを書いた人物とは……

吉田松陽という男ではないのか？」

金平糖（後書き）

届いた

銀時・高杉・桂：「……………え？」

時が止まったように思えた

久坂の口から松陽の名を聞くなど3人にとっては

予想外の出来事だった

高杉：「んで…あの人の名を……………」

久坂：「…やはり、そうだったか。

1度だけ話しをしてくれたことがあったんだ。

小さくて可愛い男の子2人組が私のところに毎日のように

来てくれるんです。ってな。どんな感じの子なのか聞いたら、

髪が長くて女の子みたいな顔の子と、少し目つきの悪いお坊ちゃんだって…。」

高杉：「先生が…俺等の話を…？」

久坂：「ああ。」

桂：「だが、何故久坂が先生のことを？」

3人が一番聞きたかったことだ

久坂：「俺には昔、女がいてな、その女ってのが、松陽の妹だったんだ。」

仲が良くてな、俺も一緒になって話をした。」

桂：「そうだったのか…。」

久坂：「ああ、だが、俺はあの人から銀時のことを聞いたことが無かったんだ。」

だから、ここに初めてきたときも、教え子だと気づくことができなかった。」

高杉：「その妹とやらはどうしてんだ？」

何気なく聞いたその言葉に久坂は

久坂：「…殺されたよ。」

高杉：「…おい、それって、もしかして…。」

久坂：「松陽が殺されたのは妹のほうから聞いた。」

その数日後、俺はあいつを1人家において出かけてたん

だ。

帰ったら家中血だらけでな。俺はそれを幕府がやったことだと考えた。

無理も無いだろ？幕府に、天人に殺された松陽の次になにもやっていない

妹が殺されたんだ、大切な人を好き放題に奪っていった奴等を

俺は許すことが出来なかった。

ま、これが戦争に参加した理由でもあるわけだ。」

銀時：「俺達と似てるな。」

久坂：「確かに、近いかもしれないな。」

薄く笑みを浮かべ、銀時の瞳をジッと見つめる

久坂：「銀時、俺はお前達が此処に来た訳を知りたい。

小太郎や晋助、松陽との出会いや、その後のことを…

無理にとは言わんがな…。」

「……………」

出来ることなら消してしまいたい記憶

だが…

銀時：「俺は、今から7年前、先生に拾われたんだ。」

久坂：「拾われた？」

思ってもみなかったその言葉に戸惑いを見せる

銀時：「ああ、今みたいな戦場で、刀持って人を殺して生きてきた。

髪も眼もこんな色だから、誰も俺を人として見てくれなかった。

鬼とか化け物とか、そう呼ばれるのが当たり前になっていたところに、

あの人がやってきたんだ。刀の使い方教えるとか言っさ、

正直俺には意味が分からなかった。殺す以外にどう使うのかなんて

全く知らなかった。」

銀時は懐かしそうに話した

松陽と過ごした日々、そして、別れの時のことを…

全てを話し終えたとき、

久坂：「…辛かったな…。3人ともここまでよく頑張ったな。」

そばに居た3人を一気に抱き寄せ、呟いた

話したところでどうにもならないと思っていた

自分達の悲しみなんて誰にもわからないと思っていた

だが、どこかで気づいて、手を差し伸べてほしかった

ぶつけようのないこの思いを誰かにわかっていてほしかった

その思いがやっと届いた

久坂の腕の中で、静かに涙を流した

坂本：「わし…もう帰ってもいいがか（泣）」

届いた（後書き）

ありがとうございました！

久坂の実際には妻ですね、この人が吉田松陰の妹だったのには正直驚きでした。

歴史全然だめなので、そういうのも全然知らなかったんですけどね。

道場で

次の日の朝

銀時は桂や高杉と道場にいた

桂：「おい、本当に大丈夫なんだろうな？」

銀時：「平気、平気。今身体動かしとかねえと天人に殺されちまう。」

そう言って防具をつけ、竹刀を構える

高杉：「私語はよせ、準備はいいな……？」

高杉の言葉で緊張が走る

高杉：「……始め！！」

パアンッ

10秒も経たないうちに銀時の竹刀が桂の頭、つまり面に綺麗に入っている

病み上がりとは思えないその速さに目を見張る

高杉：「勝負ありだな。銀時よお、今まで通りの動きだったじゃねえか。」

なにが殺されるだよ。ツラのほうがヤベェじゃね？」

桂：「うるさいぞ、それにツラじゃない、桂だ。」

銀時：「今のは試合稽古みたいなもんだろ？実践になると本当無理だから。」

桂の言葉を完全無視して返事を返す

久坂：「いやいや、大丈夫そうでなによりだ。」

いきなり割り込んできた久坂

銀時：「あ、わりいな…起こしちゃったか？」

久坂：「いや、まあ、目が覚めたときにお前が横にいなかったことには

少し驚いたがな。」

フツツと笑いながら銀時の元へ近づいて来た

銀時：「寝てばかりだとなまっちまうからな。2人に相手してもらってたんだよ。」

久坂：「ならいいがな。」

坂本：「珍しいのゝおんしら4人がこげなとこにいちよるのは。」

久坂：「そういうお前も珍しいな。なにかあったのか？」

坂本：「人のこと忘れて思い出話しちよった奴がよく言っぜよ。」

久坂：「そう拗ねるな。で、話があるんじゃないのか？」

坂本：「おお、いきなりじゃが、5人で川にでも行かんか？」

銀時：「川…？んでいきなり…。」

坂本：「なんとなくじゃ、今日は天気もいいからの、

なんにも考えず昼間の空を見上げるのも悪くないじゃろ
？」

銀時：「それは…まあ。…けどよ、戦はどーすんだ？」

3人が気になっていること

坂本：「聞いてなかったが？」

銀時：「…なにを？」

銀時は桂と高杉のほうを見るが、2人もなんのことだか…という顔つきだ

坂本：「昨日の会議で今まで4つに分かれて戦っていたまあグループじゃな、

そのうちの1つの固まりだけは戦には参加せずに、食いモンや包帯

なんぞを買いに行くことになったんじゃ。ま、人数は減ったが

戦い方が変わったわけじゃないきに。」

高杉：「で、今日残るのは俺達って訳か…。」

坂本：「そいうこつちや、じゃ、行くぜよ。はよお準備するきに！」

銀時：「へーへー。」

道場で（後書き）

ありがとうございました。

河岸へ（前書き）

更新が遅れてすみませんでした！！！！

部活の試合やらテストやらでとにかく忙しくて…

そのうえ短いです。

今日か明日のどちらかで2話投稿しようと思っています！

よろしく願います！！

河岸へ

銀時：「辰馬、おめーこんな場所よく知ってたな。」

必要な物を買ひ揃え、河岸に腰掛ける

坂本：「綺麗のところじゃろ。ほれ、さっき買った饅頭じゃ、ここで食べて帰るきに。」

高杉：「いいねえ。」

坂本：「1人3つくらいかの。」

銀時：「んでもいい、早くよこせー!」

久しぶりの菓子に子供のようににはしゃいでいる銀時は坂本から饅頭を貰うと、

勢いよく口の中へと放り込んでいく

桂：「もう少しゆっくり食わんか! 詰まらすぞ。」

銀時：「わかってるって……うつ、ゴホ、ゴホ!」

のどを詰まらし苦しそうに咳をする銀時の背中を桂がため息を吐きながらさする

桂：「銀時、俺の話し聞いておったのか？」

高杉：「馬鹿だなあ、一気に食おうとするからそんなことになんだよ。」

銀時：「うるせえ、チビ。おめーの持ってるその饅頭も食ってやるうか!？」

涙目になりながらも言い返す

高杉：「んだとクソ天パ。」

銀時：「チビに言われたかねえんだよ!！」

桂：「おい、やめぬか2人とも!！」

口喧嘩を始めてしまった2人を桂が止めようと努力するものの…

銀時・高杉：「うるせえヅラ!！」

ブチッ

桂：「ヅラじゃない!！桂だあ!！」

桂までもが3人の中に入ってしまった

残された久坂と坂本はというと…

久坂：「本当に、仲がいいな。」

坂本：「ほんまじゃの〜。……久坂。」

久坂：「なんだ？」

坂本：「ツラの饅頭がまだ残つちよる、食べたらいかんか？」

久坂：「……やめとけ、めんどくさいのはごめんだからな。」

坂本：「じゃ、今度多めに買ってくるきに。」

久坂：「そうしてくれると助かるな。」

子供みたいに（前書き）

さっき書いた話より短いです

子供みたいに

あれから2時間ほどの時間が過ぎた

口喧嘩をしていた3人は

あのあと高杉が足を滑らし3人仲良く川へ落ちた

びしょびしょになりながらも子供のころにやっていた

遊びをし、疲れて眠ってしまっている

久坂：「おい、そろそろ帰るぞ。」

久坂が一人一人の肩を叩き、起こす

桂：「寝てたのか…？」

久坂：「ああ、ぐっすりとな。悪いがその2人起こしてやってくれるか？」

桂：「ああ。」

1番最初に起きた桂は寝ている2人肩をゆする

桂：「起きのか2人共。」

高杉：「…ん…ツラか…。」

目をこすりながら起き上がる2人

銀時：「よく寝たわ。辰馬、今日は楽しかったよ。」

照れくさそうに礼を言う

坂本：「たまには生き抜きも必要ということじゃき。礼なんて言わんでいいぜよ。」

ニカツと笑いながら歩きだした

久坂も含めて4人も

自分達のいるべき場所へと帰っていった

混乱（前書き）

短いです。
すみません。

混乱

銀時：「らあああああ！！！」

ブシイイイイ

完全復活を果たした銀時は戦場に立っていた

天人は銀時が死んだものと思っていたらしく、酷く混乱している

銀時：「高杉！ちょ、どういことだよ！俺死んだことになってんだけど！？」

近くにいた高杉に問う

高杉：「知るかよ！斬られたてめーがわりいんだろが！！！」

銀時：「うるせー！！！」

返り血を浴び、敵の血で真っ赤になりながらも斬り続ける

天人：「一度退くぞおおお！！！！！」

銀時が来たことは天人にとっても予想外のことだった

それだけ銀時の力は大きかった

銀時を恐れ、背を向けて逃げ回る天人を斬り倒していく

300ほどいた天人は一気に半分になった

自分達の周囲に天人がいなくなったことを確認すると

銀時：「いやゝさすがにきついわ。」

どかつと腰を下ろして言う

桂：「嘘をつけ、いつも通りだったではないか。」

銀時：「いやいや、今日は数が少なかったただけだって。」

桂：「そうだな…。」

久坂：「白夜叉がいないことで油断していたんだろうさ。」

明日から増えるだろうに。気をつけろよ。」

銀時：「まじかよ。」

冷や汗を流す

久坂：「ま、今日は飯食ってゆっくり寝ろ。明日から忙しくなるぞ。」

銀時：「まったく、めんどくせえ。」

久坂：「そういうな、人気者め。」

銀時：「天人の中で人気者なっただって…いいことなんざひとつもねえよ」

混乱（後書き）

ありがとうございました！

残念（？）ながら

明日から期末テスト1週間前なので投稿することができません。
すみません。

いつものように（前書き）

テスト更新遅れました…すいません…

「逢いたくて」の前書きでも同じようなことを書いたと思いますが、家でいろいろあって別のパソコンから投稿している状態なんです。なので、前と同じペースで続けていくことができません。

最後まで書くこともできないかもしれません。

ですが、週に一回の更新はできればやっていきたいと思っております。

これからもよろしく願います。

いつものように

返り血で真っ赤になった銀時たちが帰ってきた

「久しぶりに見たな… やっぱすげーよ。」

「ああ、天人共は白夜叉が死んでいるものと思っていたらしいくな。

大混乱だったっつー話だぜ？」

「そりゃそうだろうな、明日から数増えるんじゃないの？」

「勘弁してくれよ… 俺らの身がもたねえよ。」

「違いねえ。」

小さな声で話しをしている、聞こえていないと思っているのだろう

久坂たち以外の者は銀時のことを名前で呼ばなくなった

声をかけるものすらない

桂：「銀時、気にする必要はないぞ。」

銀時：「ああ。」

高杉：「そうだぜ？言いたい奴にや言わせとけばいいんだ。」

銀時：「わあってるよ。それより、そろそろ会議の時間じゃね？

着替えたら一緒に道場行こうぜ？」

高杉：「ああ、坂本と久坂は先に行ってるだろうがな。」

銀時：「じゃあ、あいつらと楽しむのは夜ってことだ。」

桂：「おい、また飲むきか！？」

銀時：「大丈夫だつて！！」

桂：「…早く着替えていくぞ。」

諦めて着替えをはじめた桂

銀時・高杉：「へーへー。」

会議が終わりいつもの屋根の上

久坂：「明日からまた忙しくなりそうだな。」

桂：「ああ。」

坂本：「じゃ、今日は明日の分も飲むきに!!」

銀時：「お、いいね。」

久坂：「おいおい飲みすぎるなよ?」

銀時：「わかってるって、久坂も…ほらっ。」

銀時が久坂に酒を注ぐ

高杉：「じゃ、そろそろ飲むか…。」

誰かさんが復帰したおかげで明日からたいへんだしな。」

銀時：「俺のせいなの?」

機嫌を損ねた銀時の頭を坂本が軽く叩く

銀時：「んだよ。」

坂本：「そんな気にすることじゃないき。」

銀時：「そうだな。敵の多すぎで死ぬんじゃないぞ!?」

高杉：「斬られたやつがなに言ってやがる。」

銀時：「あのさ…いい加減忘れてくんない?」

そのあといつものように朝まで遊びまくっていたとか…

いつものように(後書き)

ありがとうございました。

護れない（前書き）

遅くなりました。

内容もいつものごとくめっちゃくちゃですが、よろしく願います
！！

護れない

次の日から天人の数は急激い増えていった

銀時：「んだよこの数！！昨日までと全然違うじゃねえか！！」

桂：「だから増えるといっていただろう！！」

銀時：「ここまでなるなんてだれも思わねえって！！」

久坂：「てめえら！話するのは勝手だが、2人してくたばんじやねえぞ！！！」

銀時：「わあってるよ！！！」

話すことでお互いの無事を確認するしかない状態だ

それだけ今まで異常に激しいものだった

天人を皆殺しにしたころ、

その場に立つのはたったの5人

銀時、桂、高杉、坂本、久坂のみ、

桂：「……………終わったか…………。」

高杉：「…ああ…」

坂本：「……………」

久坂：「……とりあえず、帰るぞ。俺たち以外……全滅だ…」

坂本：「そうみたいじゃの、銀時、帰るぜよ。」

ひとり空を見上げたまま動かない銀時に坂本が声をかけた

銀時：「…俺、あとで行くから、先行っててくんね？」

久坂：「…わかった。雨が降りそうだからな、すぐに帰って来いよ？」

銀時：「ああ。」

それだけ言つと4人は銀時に背を向け、帰っていった

戦場には銀時だけが残った

銀時：「……………」

銀時は一度辺りを見渡し、下唇をかみ締める

（俺が来なければ天人がこんなに攻めてくることもなかった

こんなに沢山の仲間を失うこともなかった

全部…俺のせいだ…

化け物と言われようが白夜叉と呼ばれようが、絶対に護り通すと決めたのに…)

曇天の空の下、ひとり哀しむ銀色に

こびりついて取れにくくなった血を洗い流すかのように雨が降り始めた

頬をつたうのは雨か、

それとも涙なのか……………

護れない(後書き)

ありがとうございました!!

新たな武器（前書き）

遅くなりました！！

よろしく願います！！

新たな武器

数日が過ぎた

天人の勢いは止まることはなく、人の数だけが減っていく日々
体力だけが削られていった

そんななかでも5人はいつものように話をし、楽しんでいる
銀時らが稽古をしていたときだ、外が騒がしくなりはじめた

天人が攻めてきたのだろう

銀時：「つたく、めんどくせえな…。」

桂：「そういうな、行くぞ。」

防具をつけ、腰に刀をさし、いつものように戦場へ向かう

始めにはいつもこの一言

久坂：「テメーら！！絶対に生きて帰って来い！！」

ひとりたりとも死ぬんじゃねえぞ！！」

「おおおおお！！！！」

そう言いながらもほぼ毎日半数を超える人間が死んでいく

最近では銃を使う天人まで現れた

それほど天人の技術は進んでいたのだ

天人：「撃てエエエ！！撃ち殺してしまえエエ！！！！」

パンッ

「うぐっ、」

「がはッ」

志士たちが次々と倒れていくなか、天人はさらに刀で向かってくる

久坂：「くそ、これじゃ死人が増えてくただけだ、一度考え直さねえと！！」

敵を斬りながらも久坂は焦りはじめた

そんなとき、この場に似合わぬ能天気な声が聞こえてきた

坂本：「久坂、見てみ、凄いの手に入れたき！！」

そう、坂本だ

たまたま近くで戦ってた坂本がその手に入れたものを久坂に向けて投げた

久坂はそれを受け取り、ふっと笑った

久坂：「……！……ふっ、手癖の悪さだけは相変わらずってか？」

坂本が手に入れたもの、それは銃だった

倒れていた天人から奪ったのだろう

坂本：「変な言い方はやめてほしいぜよ！落ちとったん拾っただけじゃ！」

2つあるき、1つやろうと思うての、弾は入っちよる。」

久坂：「そうかい、ありがとよ！……」

坂本：「もう少しじゃき……！一気に行くぜよ……！」

新たな武器（後書き）

中途半端ですけどありがとうございます！！

バカばっか（前書き）

お久しぶりです!!

家からパソコンがなくなってしまったのでなかなか投稿することができません

パソコンがないとこんなに寂しいんですね。

短いですがよろしくお願いします!!

バカばっか

残っていた天人を全て撃ち殺した2人。

その帰り道。

坂本：「いやあ、凄い武器じゃのー。」

久坂：「ああ、天人の武器を使うのは気が引けるが、使いやすさは認める。」

坂本：「堅いの。武器なんぞうまく使えればいいだけだよ。」

久坂：「そうだな。ん？ありや銀時らじゃねエか？？」

坂本：「おお！！！！ほんまじゃ！！！！きんときー！！！！！」

坂本が手を振りながら名前を呼ぶ……が、

銀時：「だ〜か〜ら〜銀時ってってんだろおがああ！！！！！」

ドガシヤアアアッ

坂本：「な、なんじゃ金時、そんなにわしと会いたかったがや！」

！」

銀時：「なに言っただバカ本！！っーかなんで金時！？

銀時だから！！！！お前この間も言っただよな！？

最近まで銀時だったのによお！！！！」

坂本：「わしあ過去のことば忘れるタイプじゃき、

そげなこと覚えちゃおらんぜよ、あはははははは。」

銀時：「てんめ……っ！！！！！」

久坂：「元気だなあ。あ、お前ら！バカ2人はほつといて、

一緒に帰らねえか？？」

銀時と一緒に歩いてきた桂と高杉に言う。

桂：「ああ。」

高杉：「巻き込まれたくねえしな。」

そう言っただ3人歩きだした。

銀時：「ちょ、待てよ！！！！」

久坂：「お、来た。」

坂本：「わしらだけ置いていくなんて酷いぜよ!!」

桂：「貴様らに付き合っていたら日が暮れるだろう。」

銀時：「俺あそこまでガキじゃねえ。」

高杉：「なに言ってんだ、じゅうぶんガキじゃねえか。」

銀時：「俺よりちっせえやつがうるせえよ。」

高杉：「んだとこの天然パーマメント!!!!!!」

銀時：「略さずに言いやがったな!チビ!!!!!!」

桂：「……………きりがないな……………どうする?久坂。」

久坂：「んゝ、さきに戻って飲むか」

桂：「…だな…」

そっいつて戦場におバカ3人を残して、2人は帰って行った。

バカばっか（後書き）

ありがとうございました！！！！

投稿できないなかでも、お気に入り件数が増えていたので
本当に嬉しかったです！！！！

次いつ書けるかわかりませんが、これからもよろしく願います
！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3848s/>

哀しき夜叉

2011年10月8日23時12分発行